

第3章 社会とその病弊¹

この章で検証する領域にはすでに言及してきた。例えば、2つの「煙突掃除の少年」の作品には随時言及してきたし、組織宗教へのブレイクの批判の分析を始めているし、その批判を通してブレイクは腐敗し、不正義な現状を支えている偽善的な組織として英国国教会を見なしていた。そこではブレイクは社会転覆を狙うような信念を抱いており、不正義、抑圧、独裁に対して義憤にも似た怒りを抱いていたことは明らかになった。この章では『無垢と経験の歌』から6作品の検討へと進み、預言書の3作品『ユリゼン第一の書』、『ヨーロッパ、預言書』に加えて、『天国と地獄の結婚』の検討へと進めてゆこう。

「煙突掃除の少年」（『無垢の歌』）

以下の詩が『無垢の歌』の「煙突掃除の少年」である。

「煙突掃除の少年」

お母さんが死んだとき、僕はまだ幼かったけれど
お父さんはぼくを売った、ぼくの舌は
「煤払い、煤払い」と、まだよくまわらないのに。
それでぼくは煙突を掃除し、煤まみれになって眠る。

子羊の背中みたいに巻き毛のちびのトム・デイカは
髪のを剃られたとき泣いた。ぼくは言ってあげた。
「泣くなよ。トム。気にするな、坊主頭になれば

おまえの白い髪の毛は煤によごれないよ」

トムは泣きやんだけれど、その晩すぐに
眠っているとこんな光景を見た。何千人もの
煙突掃除、ディック、ジョー、ネッド、ジャックなどが
一人残らず黒いお棺に閉じ込められていた。

すると輝く鍵を持った天使がやって来て
お棺を開けてくれてみんなを出してくれた。
みんなは飛び跳ね、笑いながら緑の野原を駆けまわり
川で洗いよめ、日を浴びて体が輝く。

それから、白い裸のまま、煤袋を置き去りにして
雲に乗り、風の中を遊んだ。
天使はトムに言った。良い子になれば、神さまが
お父さんになってくださり、喜びの尽きる日はないよ、と。

ここでトムは目が覚めた。ぼくたちは暗いうちに起き
煤袋と煤はけを持って、仕事に出かけた。
とても寒い朝だったけれど、トムは幸せで、暖かだった。
だから、みんなが義務を果たせば、何も心配はありません。

一読するとこの詩のストーリーは明白である。語り手は幼い時に身売りされた煙突掃除の少年である。二番目に登場する煙突掃除の少年はトム・デイカという名の少年で、髪の毛が剃られたので最初動揺している。その少年はまずこの詩の語り手、そして天国と天使の夢のおかげで安心を得ている。この詩の最後では、トム・デイカは煙突掃除の少年としての新たな生活の中で幸福感を感じている。

この詩の韻律上の素晴らしさは、全体的には弱弱強格であるが、その多様性にある。いくつかの異なる多様性が見られるが、この章における主要な関心、つまりブレイクが読者に問いかけている政治的、社会的難問に進む前に、3つの多様性に注目しておこう。最初にブレイクは弱弱強格に弱強格を挿入し、長々と続く、宙ぶらりんな遅滞感をこの弱強格に与えている。その結果、弱弱強格にとっては当然の軽快なリズム感を喪失させている。この変異は第1行目の母の死と、煙突掃除の少年の極端な幼さに対して、悲しげな響きを加えている。'When my moth / er died / I was ver / y young'. 第二に、ブレイクはいくつかの詩行に強勢を追加している。例えば、ト

ムの夢に対する語り手の熱意は、すべての煙突掃除の少年の名前を列挙していることに伺える。'That thou / stands of sweep / ers Dick, / Joe, Ned / & Jack'と続き、余分の強勢が'leaping laughing they run'の詩行において、開放感を生き生きしたものにしている。追加された強勢の最も際立った例は第3行目に現れる。そこではこどもの煙突掃除人は、自分の惨めさと自分の仕事の辛さ²を街路で同時に大声で叫び、流れるような弱弱強格を完全に妨げるような方法で用い、話の全体の流れを止めている。'Could scarce / ly cry weep / weep weep weep'。ブレイクが採用している第三の効用は完璧な規則性である。再度、ブレイクは規則正しい弱弱強格の手段によって2つ以上の効果を挙げている。例えば、条件節'if he'd be a good boy'における韻律上の変節と、続く規則正しい詩行'He'd have God / for his fath / er & nev / er want joy / 間の対照は、天使のいい加減な約束に対して、単なる早口という不誠実感を加えている。一方、21行目、22行目の単音節語、不完全韻と規則的な韻律を組み合わせることで、太鼓のような単調なリズムを醸し出し、煙突掃除の少年たちの生活の苦しい仕事ぶりを伝えている。

しかし、ブレイクの韻律上の芸術性の多くはその自然の中に見られる単純さに表現されている。つまりこの詩は表現力に富んではいるが気取ってはならず、説得力のある対話を創造している。例えば、'Hush Tom never mind it'における煙突掃除の少年の会話的なリズムを見ておこう。この詩の妥協のない内容の衝撃の多くは、物語を語る煙突掃除の少年の声の平静さそのものにある。第一連の少年の幼少時代と、'So your chimneys I sweep'の必然的な結末を受容している醜悪さと現実の関係は、読者を身の毛もよだつような怒りに駆り立てる。

この詩におけるリズムと語調の簡潔な分析を振り返ってみると、2つの対照的な(しかし同様に自然な)語調を確認できる。まず、冒頭の連では恐ろしいほど現実的で、運命論的な、寒々とした声を見出した。21行目と22行目の苦しい仕事ぶりと関連させることが出来る。第二にトム・デイクの説明における熱狂的な興奮の盛り上がりに着目した。それは2つの強勢が置かれた天使の「輝かしい鍵」によって導入され、「ディク、ネッド、ジャック」という連続した強勢によって維持され、「飛び跳ね、笑いながら走っている」中で跳ね回り、飛び跳ね、規則的な'And wash in a river and shine in the Sun'の詩行で全速力で走り、歯切れのいい歯擦音によって高揚した雰囲気醸し出している。

「煙突掃除の少年」の中容を考えると、二つの対照的な見方が明らかになる。明々白々で、衝撃的な煙突掃除の少年たちの生活の実態の描写と、天使というトムの夢の中で、約束された後世の夢見るような描写である。ブレイクの結論は最終の二行連句に見られる。ここで2つの中間休止は、両方の陳述に最終的な対立感を与えている。最初の間休止は実際の状況とトムの安心させる信仰との大胆な対照を提供し、その詩全体としては、この2つの認識法をそのまま併記している小宇宙である。「そこで…」においていい加減な論理を装って紹介されている最終行は、抑圧された人々への教会の対応を示している。「もし悲惨な生活を受容し、問題を起こさなければ、夢を与えてあげよう」とその姿勢を要約することが出来る。

この詩における2つの対照的な「真実」の特徴は何であろう。煙突掃除の少年たちがおかれた実情の描写をする際に、「陰鬱な」、「運命論的な」、「荒涼とした」、「非妥協的な」という言葉を遣ってきた。ブレイクはこれらの特徴を持った描写を2つの方法で行っている。まず、詳しい説明を排除し、ありのままの説明をしている。例えば、「お父さんはぼくを売った」に注目しよう。そして、「ぼくたちは暗いうちに起き／煤袋と煤はけを持って、仕事に出かけた」は情緒的な内容を排した明白な事実のみの陳述である。第二に、ブレイクは接続詞である'so'を反復し、煙突掃除の少年トムへの慰めの言葉の論理で運命論的あきらめ感を奨励している。ストーリーの各段階は接続詞'so'(4、6、9、21、24行目)によって話をつなげている。この暗いストーリーのそれぞれの段階は、前の段階の必然的な結果として提供されている。話し手は恐ろしい一連の出来事に変更されうる、回避されうるという意識はまったく示していない。その少年トムへの慰めの言葉の論理は同じように身の毛のよ立つ思いである。トムが煙突掃除の少年にならないかもしれないという考えは、その少年の心からまったく排除されている。そのような可能性は考えることもまったく出来ないし、考えてもいない。他の変異項目、「白い髪の毛」、「剃られた頭」、「煤」は論理的に扱われている。トムは髪を失って幸せであるという恐ろしい結論は、語り手の心の中ではこの運命論的な排除の結果である³。

さらにブレイクは煙突掃除の少年たちの説明から、変化のすべての可能性やすべての情緒を排除している。読者にとってはこの平衡関係に読者自身の道徳観を持ち込むように期待されている。公平感を持つすべての人々が21世紀当初に感じた反感と怒りを体験するようにブレイクは期待している⁴。煙突掃除の少年たちは社会的嫌悪の対象であり、「文明化」を標榜する社会の中で児童奴隷という恥ずべき制度である。しかし、さらに一歩進めて、この詩が当時提示していた良心への直接的な挑戦の内容を想像してみよう。語り手は「ぼくはあなたの煙突を掃除する」と言っていることに着目しよう。ブレイクの同時代の人々は、煙突の煙道に子どもたちを押し込めていた煙突掃除業の親方、つまり奴隷の所有者を雇用していた。現代における同様の状況について考えるべきである。韓国、タイ、台湾で困窮を強いる給与で働かざるを得ない14歳の工場労働者が、「それでぼくはあなたのウオークマンを組み立てている」と読者に問いかけている。読者に直接、問いかけ、その不正な制度への貢献者として見なしている。現代には煙突掃除の少年は存在しないので、気楽に構えていると、ブレイクのメッセージを彼が意図した形で受け取っていないことに気がつく。

この詩のもうひとつの視点はトムの夢である。この夢はリズムが強烈な詩形で、興奮を引き起こさせる内容であり、熱狂的に述べられている。同時に、この詩は厳密に死後の時間、この世ではなく、別の世に委ねられている。煙突掃除の少年たちは「黒いお棺に閉じ込められていた」ところから始まっている。この詩の天使は作品「夜」の天使に類似している。この世の厳しい生活の現実を変えることも変えようとしなないし、天使は理想化されたあの世でしか働いていない点において類似している。トム・デイカの夢に対してシニカルな立場に立ち、その夢を一つの誤魔

化しとしか考えることが出来ないが、ブレイクの詩は天国の夢を嘘と見なすことを許してはいない。「夜」の詩でライオンの「新しい世界」の限界を認め、疑惑を一時棚上げせざるを得なかったように。「煙突掃除の少年」ではトムの夢の真偽を見極めることを求められているわけではない。むしろ、ブレイクは「トムにとって」真実であることの必要性を強調している⁵。動揺する煙突掃除の少年に対するその夢の影響力を否定することは出来ない。というのは寒い朝にも拘らず、「トムは幸せで、暖かかった」。

この詩が提示する問題は、「無垢」の世界が内包する社会的なジレンマである。恥ずべき冷酷さ、不正、そしてその不正を維持している宗教的喧伝に直面している。読者は必然的に、その事実と対峙する時、事態を変えなければという衝動に駆られる。少年たちが自由を獲得するために援助し、多分心無い父親や、煙突掃除の少年たちの親方、その利用者(読者自身)、道徳的恐喝を武器とする「天使」の顔を持つ教会を攻撃したくなる衝動を感じる。この全体像の中では悪役に不足することはない。問題は犠牲者自身がその現実に満足しており、他の煙突掃除の少年である語り手には明らかに他の生き方が考えられないことである。真実を告げることによって、子供たちを惨めな気持ちにすべきかどうか、読者にとってのジレンマである。少年たちは悲惨なほどに搾取されていることを告げるべきなのだろうか。詩の最後で幸せでいるトム・デイカのように満足している犠牲者に何が出来るのだろうか。より不幸な思いに陥れるべきなのか、そのままにしておいたほうが良いのであろうか。

ブレイクの「煙突掃除の少年」は、その対照的な見方の両方の視点からこの問題を具体的に表現している。語り手の運命論と限られた展望と、トム・デイカの夢の熱心なエネルギーが読者のジレンマを深めている。ブレイクは詩を「無垢」の視点に厳密に限定することによって、心を落ち着かせない効果を獲得していることに注目すべきだろう。作品「夜」で同様に分裂した視点という、同様の問題に出合っている。しかし、煙突掃除の少年の場合では、視点の分裂はより正真正銘のことであり、読者に一層の激怒をかきたてている。

この詩における夢と現実の関係はどのようなものだろう。二つの視点は繰り返し、率直にこの詩の中で併記されてきたと指摘してきた。この点では語り手は両者のいかなる関係も示唆してはいない。それぞれが「事実」であり、ひとつは客観的な事実であり、もうひとつは主観的事実なのであり、それに尽きる。しかし、天使と天使の言葉を受け入れる語り手は条件つきの関係を提案しており、この条件の恐ろしい均整は最後の二行連句の対立的な構造の中で強調されている。天使と語り手のメッセージは、「良い子」になって、「すべて義務を果たしなさい」というもので、換言すると、悲惨な生活と貧困に不平を言わずに身を委ねよというものだ。その代償に、楽観的な夢が与えられる。もちろん、このやり取りは語り手が、慰めの言葉から排除した同じ理念を排除していることに着目している。つまり、この世では存在の姿を変えることも改善も出来ないという理念である。詩の前半で夢と現実をそのまま併記して、二者間のいかなる意味での実質的關係の欠落を際立たせている。天国の存在の有無を信ずるかは別にしても、それぞれの世界で、こ

どもが奴隷に身売りされているという道徳的恥辱を解消することが出来ると、ブレイクは示唆している。

「煙突掃除の少年」(『経験の歌』)

『経験の歌』の「煙突掃除の少年」では同様の状況が展開しているが、新たな視点を導入している。

「煙突掃除の少年」

雪のなかを小さな黒いものが
「煤払い！煤払い！」と悲しい声をはりあげて通る。
「おまえのお父さんとお母さんはどこにいるんだい？」
「二人とも教会にお祈りに行っているよ。」

ぼくは荒野にいても楽しく
冬の雪のなかでも笑っていたので
両親はぼくに死の着物をさせ、
悲しみの歌を歌うようにしこんだのさ。

そしてぼくが楽しく踊り歌っているので
両親はぼくに少しもひどいことをしたとは思わず、
ぼくたちの惨めさで天国をつくっている
神さまや坊さまや王さまを崇めにいくのさ」

この詩の中で、表現されている煙突掃除の少年の運命に関する異なる視点を定義することから始めよう。ここでは少年の状況に関する3つの見解と出会うことになる。まず、観察者、少年自身、そして両親の見解である。一読すると観察者は哀れみと憤りを感じていることが明らかになる。煙突掃除の少年は搾取されている自分の状況を理解し、両親は自己を正当化して、自分の良心の呵責を和らげている。

韻律は再度、弱強格と弱弱強格の組み合わせたものであるが、弱強格がこの詩では大勢を占めており、『無垢の歌』の詩よりもゆっくりとした調子で、倦怠感の効果を醸し出している。以前と同じように、ブレイクは単語'weep'を反復し、2行目では韻律上その単語を孤立させている。しかし、ここでは少年の叫びを「悲しい声」と呼んで、それを第二連の最後で少年自身に反復させ、その気持ちを明確にしている。最後の単語'misery'は韻律を完璧に乱している。それはあたかも

この単語が、偽りの夢と偽りの隠蔽を最終的に断片化しているように、両親の見せ掛けの「天国」の装いと詩の韻律に亀裂を引き起こしているようだ。しかし、詩全体の退屈の語調とブレイクが用いている不吉な押韻語（'snow'（2回）、'woe'（2回）、'death'、'injury'、'misery'）は、見せ掛けの「天国」の正当性を執拗に危ういものにしてしている。

ここでこの詩の3つの視点を詳細に調べてみよう。観察者の視点は、煙突掃除の少年を「悲しい声」を挙げている「小さな黒いもの」と呼んで、哀れみの感情を喚起する。ブレイクは観察者の感情がかなり乱れていることを最も単純な方法で伝えている。「お前のお父さんや、お母さんはどこにいるの」という疑問は、少年の状況に関する説明と非難の対象への欲求を伝えている。事実、観察者は読者としての役割を演じている。彼は困窮して戸惑い、彼の感情を吐き出すために被告を見出そうという対応を示している。

両親の視点は3段階に分かれている。まず、第二連で両親は子供が幸せだったので悲惨な状態に子供を身売りしたと語られている。これは「失われた少女」のライカの両親の姿勢よりも極端な例であり、少女の親は自分たちが惨めなので、子供を惨めにしたといわれている。つまり、子供の幸せに対する嫉妬を暗示しており、両親には子供の無垢性が耐え難かったのである。第9行から10行にかけて、両親が辿っている第二の段階では、自分の息子は未だ幸せなことを理由に、親は罪悪感から解放されている。「無垢」の詩のジレンマを、別の観点からではあるが、再提出しているため、この段階での両親の感情は重要である。「無垢」の詩では「明らかに恐ろしい状況におかれている犠牲者に、本人は幸せではあるが、何が出来るだろう」という疑問を投げかけている。ひとつの答えは両親のとった態度である。自らは別に子どもを直接的に傷つけてはいないので、責任感と罪悪感をごまかし、悪の存在を否定することである。疑問を再提出し、この様に答えることでブレイクはこの2つの詩に対する読者の反応を複雑なものにしてしている。両親は観察者の欲求に答えているように見えるが、両親に明らかに責任があり、怒りや義憤にとってまたとない標的、身代わりを捜し求める状況となっている。同時に、社会的不正に対する目をつぶる反応が読者には拒否されている。「何故哀れな子を惨めにしてしているのか、少年を幸せのままにしておいたほうが良いだろう」と言って最初の詩に答えることは出来ない。

両親の視点の第三の段階では、突然、読者の攻撃目標を拡大している。両親の心理は明らかである。罪悪感を抱く必要がないので両親は喜んでいる。息子は天国へ行くと納得しているため、両親は罪悪感を感じていない。両親は自分たちを良心の呵責から救ってくれるので、教会と国家という組織全体に感謝している。煙突掃除の少年には、教会、国家、両親が偽善的な誤魔化しに共謀していることは明らかである。事実上、「悲惨な状態」にある天国を作り上げているのである。

煙突掃除の少年の視点はこれ以上の問題を含んでいる。一方で、少年は自分が身売りされた生活についてはっきり述べている。少年は「死の衣」をまとい、「悲しみの声」をあげている。少年を傷つけていないと「考えて」いるのは両親だけである。社会的組織が事実上悲惨な状態にある天国を創り出している。他方で、少年は煙突掃除に身売りされる前もその後も幸せなのである。

少年の幸福感は災難の影響は受けていないのである。「冬の雪のなかでも笑っていた」し、「ぼくが楽しく踊り歌っている」とあるように現在形で書かれている。このことは更なる疑問を突きつける。この煙突掃除の少年はトム・デイカの夢の幻想には囚われていない。少年は自分の恐ろしい生活を認識しており、教会の教えを全面的に否定している。それでは何故少年は幸せのままであることが出来るのだろうか。

煙突掃除の少年の態度は今までにないもののように思える。これまで「無垢」の世界の視点に限定されている人物の精神状態を見てきた。例えば、最初の詩のトム・デイカや語り手、子羊に問いかけ、自分の穏やかな人生体験から穏やかな創造者を推論している少年がいた。そして、「大地の答え」の大地や「失われた少女」のライカの両親の例に見られるように、「経験」の世界の見地に囚われた人物にも出会ってきた。「無垢」と「経験」の両方の世界を明確に理解し、その認識にも関わらず幸福感を維持しているこの煙突掃除の少年は新たな視点を提示している。

ここで、立ち止まってこの2つの詩の社会的、政治的行為に関して見てきたことをまとめておこう。

まず、ブレイクはマルクス主義、社会主義に類似した多くの方法で徹底した、急進的な社会の分析を提示している。既成の権威が人々を搾取し、抑圧しているのである。この社会的権威には「国王」、あるいは国家、教会とその神父たち、そして腐敗した現状の維持に貢献し利益を享受している中産階級の読者自身が含まれる。子供が「身売り」されているとき、この搾取に対する物質主義的な動機が明らかにされている。

第2に、ブレイクは複雑な様式で社会的不正義への批判を提示している。少年の両親には失墜した愛、あるいは無垢への嫉妬が見られる。教会は両親と共謀し、従順を強制し、天国の夢を提供し、両親を責任感から解放している。他の犠牲者も共謀して、異なる存在を想像できない状態にある。まとめると、不正で腐敗して、「無垢」と「経験」の狭量で恐ろしい見解に囚われているのは社会組織全体なのである。安心できる身代わりはないのであり、むしろ多くの存在がその悪に貢献している。ここまで見てくると、この2つの詩が最も批判している独裁的な機関は、教会であることを認識せねばならない。

第3に、ブレイクは大いに理解の問題に関心を向けているのである。2つの詩は見解の異なる限界を列記し、可能な進歩と改善における理解の中心的な役割を発展させている。カール・マルクス⁶は「共産主義の父」と呼ばれているが、平等に向けた社会の進歩における決定的な段階として教育を挙げている。社会的階級の分析において彼は、中流階級がますます理想主義的になり、従って労働者階級の教育に努め、積極的に反発と経済的力の主張へと向かうと予言していた。ブレイクの場合、『無垢と経験の歌』の構造は、2つの決定的に限定された視点の対立に基づいており、理解と明晰に見通すという課題を変化への希望の根幹においていることを強調している。

最後に、この2つの詩は積極的な社会的運動の詩であることを認識しなければならない。この作品は技巧的に美しい詩であり、「経験」の詩における少年の両親の態度の描写に見られるよう

に心理学的にも正しい詩で、審美的な喜びを与えてくれるかもしれない。しかし、この2つの詩は急進的、積極的方法で読者を駆り立て、読者としての反応を操って、読者の自己満足に攻撃を仕掛けてくる。この作品は読者に問題を提起し、憤りと不安の感情を抱かせる。怒りの対象は社会全体のシステムであり、そのシステムが哀れみを抱く苦しみを与えているのである。ブレイクがこの2つの詩に政治的意図を込めたことは明らかである。

ブレイクの詩の中に込められた政治的目的はこの章の後半で詩と預言書の役割について考えさせてくれる。慈善の問題に焦点を当てている「聖木曜日」の詩作品をじかに検討していくことになる。これからの分析の目的にあわせて、次の2つの作品をある程度一緒に取り上げていこう。

「聖木曜日」⁷ (『無垢の歌』)

『無垢の歌』からの詩は次のように展開する。

「聖木曜日」

聖木曜日の朝、あどけない顔をきれいに洗い、
赤、青、緑の晴れ着の子どもたちが二列になり、
雪のように白い杖を持った白髪の寺役人に導かれ、
セント・ポールの円屋根へと歩む有様は、まるでテムズ川の流れ。

おお、なんと沢山の子どもたち、ロンドンの町の花よ！
他には見られない輝きをたたえて、みんな行儀よく、並んで坐っている。
大勢のざわめき、だが、子羊の群れそっくり。
それはあどけない手をあげている数千の男の子や女の子。

巨大な風のように子どもたちは天へと歌声をあげる、
それとも天の座席の間の心地よく響きわたる雷のように。
はるか下方には、貧しい者の守り役の賢い老人たちが坐っている。
だから、慈悲を育てよ、天使を戸口から追い出さないように。

この詩は毎年恒例の行進を描いており、ロンドンの極貧の子供たちが数千人、福祉施設からセントポール寺院へと行進していた⁸。その後、子供たちの擁護者が見守る中で、子供たちの信心深さを表わす行為として教会での礼拝に参加していた。ブレイクは、『無垢の歌』に相応しく、曖昧な調子を採用している。そこで、寺役人は、老齢で無気力と清教徒主義の特徴である「白髪」

であり、「雪のように白い杖」を手にしていた。そうして、寺役人は子供たちの「下方」に象徴的に坐っていた。しかし、この詩の中では「貧しい者の守り役」とはっきりと呼ばれている。この文脈の中では、この表現には曖昧さが残る、つまり、貧しい子供たちを守る智慧は、親切心、利己心からなのか、あるいは組織を擁護しようとする動機なのだろうか。最終行も同じように曖昧さを含んでいる。つまり、読者は貧困さゆえに子供たちに憐憫を抱くべきなのか、公共の場での信仰の表現を強いられ、搾取されているが故に子供たちに憐憫を抱くべきなのかの問いは、直接読者に向けられており、その答えは未解答のままである。

「聖なる木曜日」(『経験の歌』)

『経験の歌』の「聖なる木曜日」の詩は次の通りである。

「聖なる木曜日」

これが聖なることなのか、
富んで実り豊かな国に
幼な子たちが惨めな状態にされ、
冷たい強欲な手で育てられているのを見るのが。

あの震えわななく叫びが歌なのか。
あれを喜びの歌といえるのか。
そしてあんなに多くの子供が貧しいのか。
ここは貧困の国だ！

そして、彼らのために日は決して輝かない。
そして、彼らの田畑は荒れ干からびている。
そして、彼らの道には茨がはびこる。
そこは永遠の冬だ。

なぜなら、日の照るところはどこであれ
雨の降るところはどこであれ
幼な子がひもじい思いをすることは決してなく、
貧乏が心を脅かすこともないからだ。

この詩の中には、『無垢の歌』で示唆された相反する想いへの批判が表明されている。ブレイクは「富んで実り豊かな国」の自然の領域と、子供たちの悲惨さと貧困を対比している。表現上、話し手は理解不能の姿勢をとっている。そうすることで、同一の世界における実り豊かな自然の貧困の共存は道理に合わず、状況は不自然であることを強調しようとしている。この詩は豊かさと貧しさに対する驚きを表現する強烈な修辭疑問で始まっている。第二連の3つの質問は、この強烈な怒りに溢れた詩の中で、示唆された唯一の異なる視点の要因を紹介している。話し手は同一の世界に豊かさと貧しさを見出して驚愕している。そして、子供たちの歌声を聞き、その驚きを深め、その疑問文は、子供たちが本心から「喜びの歌」を歌っているのか、音楽とは思えないような「震えわななく叫び」をあげているに過ぎないのかを読者の判断に委ねている。子供たちは自分のおかれた状態にも拘らず歓喜をもって歌っているという可能性は、『経験の歌』の煙突掃除の子供の状況に類似した姿勢を示唆している。その子供の幸せの継続と率直に認めた「悲惨」は同じように説明されていない。しかし、この詩ではそれが果たしてブレイクが示唆していることなのかは確信が持てない。神を讃える子供たちの歌は強いられたもので、心からの歓喜ではないので、この疑問文には皮肉が込められているかもしれない。ここで我々自身の読みを持ち込み、この詩の意図を明確にする一助が必要となる。

詩人の目の前の世界を理解することが出来ずに、詩人は最後の2つの連で2つの自然界を描写している。まず、子供たちの世界は「荒れ干からびて」おり、「永遠の冬」の中で太陽も昇っていない。子供たちは貧しいのだから、そのような状態に違いない。次に、陽光と降雨に恵まれた世界では、貧困はありえないと主張している。

韻律は変化のある弱強調で、しばしば一行の最初で強勢のない最初の音節の代わりに、強烈で自然な強調をおき（'Babes reduced to misery'のように）、常に強勢のある（あるいは「男性調」）の押韻で終えている。全体の調子は重苦しく、強烈であり、詩行は短く区切られている。この調子は『無垢の歌』の詩に見られた、時折の弱弱強格と、躍動する、あるいは行進するリズムを与えている長めの6歩格による軽快さとは対比をなしている。前述の詩における、「無垢の」という単語は1行目と8行目の弱弱強調を誘発していることに注意を向けたい。

両詩とも、自然と季節に関するイメージが豊かである。『無垢の歌』の詩は子供たちを「テムズ河の流れ」、「花」、「子羊の群れ」に例え、その歌を「強烈な風」と「心地よく響き渡る雷」に例えている。この最後の配置は背後の意味を不吉にも仄めかしている。権利を奪われた子供たちの集団は、脅威を与える勢力を表わしている。つまり、寺役人や既成の組織では抑えることが出来ない嵐の到来であり、換言すると革命の到来である。それはもちろん子供たちの歌は、「下」に坐っている哀れな寺役人よりも遥かに強烈な自然の勢力であることを示唆している。寺役人の「雪のように白い」杖は、老齢の不能を表わす象徴であり、加えて、寺役人の「白」と「灰色」は子供たちの衣装の明るい色彩と対照を成していることに着目してきた。つまり、『無垢の歌』の詩ではイメージリーはその背後の意味を増幅している、つまり、その出来事を言葉で表現する

以上に、批判的で、矛盾を含む分析であることを暗示している。

『無垢の歌』の詩では、そのイメジャリーは平易で、典型的な自然の事物、太陽、降雨、自然の成長、四季を利用している。唯一の拡張されたメタファーは、子供の視点から世界の主観的な真実を提示している。つまり、第三連はその生活を「永遠の冬」で、「茨で満ちている」と描いている。今一度、その意味と効果は強烈で明白である。

この二つの詩が一緒になることによって、二つの強烈な勢力の存在感を伝えている。最初の詩では、イメジャリーと最終行の対立感情から生まれる迷いは、抑圧されている子供たちの内面には「強大」であり、権威ある者や彼らの弱弱しい「杖」を払拭する可能性を持つ、生まれながらの力を秘めている。その力は「天の座席」の中で雷を響かせることが出来る。2番目の詩では、語り手の義憤は、貧困は自然に対する罪であるという主張と一体となっている。怒り、そして自然それ自体がその状況を確実に質すのである。

しかし、『経験の歌』の詩は分析的で、非妥協的であるという特徴を持っている。慈善は「立派なことである」という考えは、19世紀を通じて一般的に受け入れられていたし、今日の社会や政府も認めている。慈善に貢献することは評価されているし、持てる者から持たざる者への義務と考えられている。現代においては、大きな国際的組織が先進国から第三世界の食糧援助や他の巨大なプロジェクトへの慈善活動を行っている。ブレイクにとっては、慈善は不道德な行為であった。何故、慈善活動が存在するのかと、ブレイクは問いかける。それは不平等と不正が存在するからである。それでは、どうすれば良いのか。わずかな寄付でも貧困にとってはそれ程悪いものではない、あるいは少し良くなるという印象を与える慈善活動の存在を許すべきではないと、ブレイクは力強く語っている。彼はその悪行の原因を探し、読者に向かってその原因を根絶するように勧めている。端的にまとめると、慈善活動は悲惨な兆候を抑えているに過ぎず、その病弊、つまり不平等の治癒には至っていないのである。

『経験の歌』の「聖なる木曜日」におけるブレイクの立ち位置である妥協を許さない怒りは革新的であるといえる。この詩は私的財産、法律に守られ数世紀に渡って宗教組織によって支持されてきた資本主義社会は正に基盤であるが、廃止すべきであると提案している。その時初めて、人は全て平等に陽光と降雨を共有し、「赤子が決して飢えない」世界で生きることが出来る。

この「一対」の詩の分析を通して、ブレイクの社会思想と政治思想における探求的、分析的特質を強調してきた。『経験の歌』の「煙突掃除の少年」において、批判の対象はその少年の両親に対して始まったが、速やかにその範囲を広げて社会の権力組織全体、そして社会的、政治的システム全体に及んでいることに気がつく。ここで詩人は慈善活動を攻撃し、棄却しており、その事業自体がブレイクが追及している根源的な原因なのである。彼はその組織を下手な修正を加えたり、あちこち手を加えたり、改善したりすることに関心を持っているわけではない。ブレイクは根源的な原因に向かっており、それを直視し、根絶することを勧めているのである。

「愛の園」

次に検討する二つの詩作品は両者とも『経験の歌』の中にある。最初の作品は「愛の園」である。

私が愛の園に入っていくと、
かつて見たこともないものを見た。
私がいつも遊んでいた芝生の真ん中に
礼拝堂が建てられていた。

この礼拝堂の門は閉ざされ、
扉には「汝すべからず」と書かれてあった。
そこで私は愛の園へと向かった。
美しい花がたくさん咲いていたところに。

しかし私は見た、園いっぱいの墓、
花が咲いているはずのところに墓石を。
そして黒い法衣をまとった僧がめいめいの持場を歩きまわり、
私の喜びや望みを茨で縛りつけているのを。

この詩のタイトルと最初の詩行はこの物語は字義通りではなく、解釈が必要な隠喩であることを明白に語っている。語り手は子供のころ遊んだ庭に行き、その変化に気づく。しかし、「愛の園」は幼少時代、無垢、そして全体としての自然の展開を表わしていることは明らかである。現在はその寺院と墓石が並び、僧が出没する場所は、大人の視点から見た世界であり、教会の律法が支配する『経験の歌』の視点で見た世界を表わしている。

この詩の韻律は弱弱強格であり、この作品ではブレイクは殆ど全体を通してこの規則的な様式を用いており、2つの重要な不規則な箇所を挿入して最大限の効果を達成している。最初の不規則な韻律は6行目であり、3つの強勢が連続し、その全てが子音韻で溢れており、その2つは軟口蓋音の 't' で終わり、そのリズムを烈しく事実上の終止へと追い込んでいる。'And Thou shalt not, writ over the door.' その調子は軽快な弱弱強格にとって厳しい破壊的な中断であり、かつては歓喜に溢れた自然の場を侵略した、教会の律法の烈しい攻撃性を伝えている。'Thou shalt not' は勿論、聖書の十戒のそれぞれの冒頭の言葉である⁹。

韻律上のはっきりした変化の2つ目は最後の二行で生起している。その韻律の2つの要素が突然の変化を見せている。まず、この詩行は期待を裏切って長い10音節となっており、それ以前の詩行は8音節であった。このため、予定していたより長い時間かかることとなり、音読すると最

後の2音節で息切れするかもしれない。突然の延長はうんざりする抑圧感を伝えており、僧による支配の退屈な意味のない反復と僧自身の見張り番の仕事、かれらの「見回り」を伝えている。ここでブレイクが伝達しようとしている、そのうんざりする苦役は2番目の韻律上の効果で強調され、それぞれの詩行の2番目と4番目の歩格の2番目の音節が強調されており、それは最後の音節であるかのように強調されている。これは2つの強勢を含む‘de-dum-dum’という韻律上のひとつの単位を生み出している。中間の音節に置かれた強勢の量はこの2つの詩行の中で変化しているが、そのすべては、ほぼ間違いなく余分の重さがある程度背負っている。

And Priests in black gowns, were walking their rounds,
And binding with briars, my joys & desires.

ここでの殆どの歩格における強勢の連続はリズムに更なる重々しさと憂いを与えている。反復とつまらない苦役感は、2つのしっかりした中間休止を示す規則的に配置された句点と、中間韻¹⁰ (gowns/rounds, briars/desires)によって更に高められている。教会の破壊的な抑圧を伝えている2つの強力な効果と、8行目の‘sweet flowers’の耳に残る韻律とは別に、この詩はひとつの弱強格に加えて、規則的な弱弱強格からなっている。

ブレイクの韻律上の効果がその成果を挙げているように、そのイメージリーは強力で明白なものである。一方では「緑」と「花」の間で明白な色彩上の対照が確立されているが、他方では「墓」の暗さと「墓石」の灰色と僧の「黒い法衣」と対照となっている。現在の姿、つまり黒い法衣をまとった僧たちで溢れ、人を寄せ付けない教会堂が圧倒する墓地は、次第に詩全体を覆い、灰色の墓石と暗黒の大地から11行目の「黒」色へと読み進めるに従い、詩行はますますその暗闇を深めているように思える。まとめると、この詩の全ての構成要素が次第に深まる絶望、暗黒、抑圧感にそれぞれが貢献している。

ブレイクの主題は無垢の喪失であり、その具体的な標的は自然な性的能力の否認である。それが作品「愛の園」であった。‘play’は子どもに見られる無邪気で、遠慮のない性的関心の発見に言及しているようである。しかし、語り手は今では教会の律法存在を意識しており、性は禁止条項と罰則と見張っている僧が強制している戒律に取り囲まれている。その解釈を深めて、教会堂を取り巻く墓石を死んだ、そして埋没した本能の象徴と考える解釈も生まれている。確かに無垢、‘play’、歓喜は否定的な十戒によって惨殺されてしまい、その墓石は喜びと美の死を示している。

「愛の園」の強烈なメッセージはその図版によって補強されている。その図版では一人の少年と少女は、口を開けた墓のそばで黒い法衣をまとった頭髪のない僧の指示の元で祈っている。傾いた墓石は子供たちの姿勢を石で再現し、彼らの人生が化石となって死に至ることを示している。図版の最下部には、芝生で覆われた墓の土手は十字の茨に縛られており、右上にある教会の窓の

ひし形の枠組みを反復している。そしてこれは「歓喜と欲望」の墓なのである。詩の本文は背景として扱われている。つまり、ブレイクのいつもの植物による枠取りの替わりに、この詩の本文は虫でふち取りされている。

この詩の内容はブレイクの政治的な課題への理解を深めてくれる。ここでは詩人は、社会における性的欲望を支配している規律を明白に否定している。純潔や恥や結婚の替わりに、いかなる規律にも、禁止事項にも束縛されない、性的感情の本来の促進をブレイクは唱導している。この姿勢は最近言われている「自由な愛」に向けての運動のように聞こえるが、過剰に安易な結論に至ることは慎重にならねばならない。性はブレイクの時代においても、今日においても、重ね重ね固定観念に縛られ、社会的に一般化された主題であるので、ブレイクが不特定多数との性行為、一種の性的無節操を唱導していると想像することはあまりにも安易である。それはブレイクの意図とは大きく離れている。

この時点で、これまで吟味した他の詩作品に戻り、このテーマに関する他の関連性を検討すると有効なことがしばしばあり、理解の助けとなることがある。この件に関して、性に関するブレイクの姿勢の理解に有効な3つの他の作品に目を向けてみよう。

最初に、第2章で分析した「天使」を思い出してみよう。この詩は「教会の戒律の問題点は？何故教会の戒律は不道德なのか？」という疑問に答える助けとなっている。作品「天使」では本来の性的感情が否定され、精神的に埋没（抑圧）された後の出来事の物語を語っている。「天使」の中では、抑圧された感情は利己的となり、歪曲され、不誠実になり、やがて破壊的なものとなる。そこで、この作品に言及することで、ブレイクが性的活動の抑圧や禁制条項に反対した理由が分かる。

続いて第1章で『経験の歌』の「序詩」と「大地の答え」の検討内容を思い出してみよう。これらの詩を通してブレイクはアダムとイブを追放し、罰を与えた創世記の神を批判していたことを確認した。大地はこの怒りに満ちた、性的欲望に批判的な神を「利己的で、嫉妬深い」、「冷酷な」父と呼んでいることを想起しよう。これらの作品を思い起こすと、抑圧された性的感情へのブレイクの批判はその理解を広げ、抑圧者の人格は残酷なほどに欠陥に溢れ、旧約聖書の神は恐怖と嫉妬と本来の人間性に反する冷酷さによって、彼自身が歪められていることを暗示していた。

最後に、第2章では『天国と地獄の結婚』から「性的喜びの促進」は実現するという声明に辿り着いた。つまり、「人間は霊魂と別個の肉体を持っているという概念は削除すべきである」。この言葉は読者の理解を大いに深めてくれる。「自由な愛」の名の元での乱交と性的に放縱な乱痴気騒ぎという考えはブレイクの意図ではない。何故なら教会の戒律と同じ過ちを逆の意味で犯しているのだから。教会はただ霊魂のみを求めており、乱交は肉体のみを対象にしている。これはブレイクの意図でないことは明白である。ブレイクの信念は、肉体的自己と精神的自己が統一観を持って行動する完璧な、「統一体としての」人間による完璧な愛に置かれている。これが分離した肉体と霊魂の概念が排除されなければならない理由である。『天国と地獄の結婚』の中でブ

レイクは、生命の木を守っている天使と燃え盛る剣にその場を立ち去るように求めている。この要求は墮落以前の無垢の状態、しかし、一味異なる無垢の状態への回帰を提案している。ブレイクの楽園では、断罪されることなくりんごを食べることが出来るのである。

第2章で検討を始めた自然のテーマはこの時点でも生き続けており、その重要性はますます深まっていることにやっと気づいたことになる。「聖なる木曜日」の両詩において子供たちの歌の力は自然の勢力（「強烈な風」あるいは「調和のある雷」）として表現されており、『経験の歌』からの詩は自然の恵みをはっきりと喚起していることを確認した。自然と自然なるものは寛容と善と真実の基準として記述されていることを確認した。対照的に、独善的で正義のないシステムは自然を何の意味もないものに陥れている。「愛の園」においては花と作品「緑の野」は本来の発展を伝えていることを想起させる。教会堂と墓石で溢れた現在は明らかに庭園の倒錯であり、反自然的な抑圧である。そこで自然の重要性が、様々な詩の中でブレイクが焦点を合わせている様々な社会的、政治的攻撃目標を特定する基本的な真理として、繰り返し強調されている。

「ロンドン」

この章で検討してきた短い詩の最後の作品として、『経験の歌』から「ロンドン」に目を移してみよう。

「ロンドン」¹¹

特権づくめのテムズ川の流りに沿い
特権づくめの街々を歩きまわり
行き来する人の顔に私が認めるものは
虚弱のしるし、苦悩のしるし。

あらゆる人のあらゆる叫びに
あらゆる幼な子の恐怖の叫びに
あらゆる声に、あらゆる呪いに
心を縛る枷のひびきを私は聞く。

煙突掃除の少年の叫びが
黒ずみわたる教会をすさまじくし、
不幸な兵士のため息は
血潮となって、王宮の壁をつたう。

それにもまして深夜の街に私は聞く、
 なんとも年若い娼婦の呪いの声が
 生まれたばかりの乳のみ児の涙を枯らし
 結婚の柩車を疫病で台無しにするのを。

「ロンドン」は社会の現状に対する厳しい義憤を表現しているもう一つの簡明な詩である。韻律は圧倒的に規則正しい様式であり、弱強調のはっきりと一定した調子である。「愛の園」で見た'Thou shalt not'の2つの強勢がもたらす効果に類似しているのが、第8行目の表現、'The mind-forg'd manacles'である。しかし、母音の長さや'mind-forg'd'の最後の子音はここで、'Thou shalt not'ほど突然で短く切り刻むような乱暴さをこの表現に与えていない。'Mind-forg'd'は、「虎」の中の'dare seize'や'dread grasp'の表現に見られるように耐えてきた苦痛と肉体的努力を伝えるいくつかの表現を思い出させる。他の作品で、ブレイクは最初の弱勢の音節を省略し、最初の語に強勢をおいて衝撃を与えている。4行目の'Marks'、12行目の'Run'、15行目の'Blasts'にその効果が見られる。

『経験の歌』の「聖木曜日」に見られるように、この詩の語り手の声はブレイク自身とはっきり弁別するのは難しい。ブレイクはロンドンの街路、「経験」によって墮落し支配されている世界をさ迷い歩き、衝撃と激怒を持って反発しているが、この詩の本当の強みは異なる特質を組み合わせたり、併記している思い切ったイメージの使用から生まれてきている。

冒頭の2行では、自然さえも売買の対象となっている世界が「特権づくめの（契約、雇用された）街路」から自然と商売の厳しい結合、「特権づくめのテムズ川」へのプロセスの中で明示されている。'mark'と'marks'の語呂合わせは抽象概念が具体的になっていることを示唆している。最初の'mark'は「知覚する」、「気づく」を意味している。しかし、「虚弱のしるし、苦悩のしるし」は語り手の周囲にいる人々の顔ににじみ出ている苦難の兆候である。

第二連は律法で縛られた社会（「あらゆる呪い」）における苦悩の音を築き上げており、すべてをひとつのイメージ、「心を縛る枷」に凝縮している。ブレイクは誰の心が人々を監獄に閉じ込め、その心にあるのは恐怖なのか偽りの信念であるのか、あるいは律法と偽りを生み出した抑圧者の心は誰であるのかを特定してはいない。これまでに検討してきた煙突掃除の少年に関する2つの詩を考慮し、あるいは第1章の「大地の答え」の分析を合わせて検討するならば、ブレイクは『無垢と経験の歌』のこの疑問の両面を描写していることが明らかになる。人々の恐怖心と運命観は、偽りの絶望の中で彼らを牢獄に閉じ込めている。教会は従順が信仰と取り替えられた偽りのやり取りを人々に提供している。このイメージは、「心」と「作られた鎖」を組み合わせることによって、急激に衝撃を伴って抽象から具象へとの移行を繰り返している。同時に、この3つの強勢は今まで見てきたように、苦悩と努力を伴うこの表現の長さを引き伸ばし、この表現の重みを押し量つ

ている。その時、ブレイクは「聞こえる」の中の文字通りの意味に直接立ち戻り、冷たい鉄と鎖という突然の具体的なイメージの後で、ブレイクの真の主題は苦悩と悲惨の叫びであることを思い起こさせてくれる。

ブレイクの主題に対する強烈な具体的イメージを提供し、妨げられることなく抽象的概念とはっきりとした物理的対象との間を動き回っているブレイクの巧みさは、それ自身が一種の主張のようなものである。その効果は更なる言葉をその詩の意味に付け加えることである。そのイメージは次のように語っているように思える。「心理的投獄、心理的操作、精神的抑圧は抽象的概念に過ぎないと考えているかもしれないが、そうではない。それは積み重ねられた石や鉄の柵で出来た監獄のようなものである。ひとつの考えに到達することが出来ない時、それは心理的柵の向こう側にあるので、本人自身は本当に囚われの身なのである」と。

同一の手法が第三連の政治的要点を鮮烈なものにしている。教会はひとつの建物、教会堂として提示されており、煤と死の色彩で覆われた「黒ずんだもの」となっており、その色はまた、煙突掃除の少年の光明のない生活を象徴している。「黒ずみわたる」とは一語の中に具象と抽象を結合している。「不幸な兵士のため息」は戦場で息を引き取るときの最期の一息であり、鮮烈な具象的なイメージでは「血潮となって、王宮の壁をつたう」のである。政治的な要点としては、国王は兵士の命を利用して自分の贅沢な生活を維持しているが、もちろん英国軍の兵士は国王の宮殿で戦っているわけではない。ブレイクの時代では兵士はアメリカやインド、スペイン、ベルギー、フランス¹²で命を落としていた。ブレイクは戦争の血のりで王宮の壁を塗りたてることによって、自分の急進的な政治的主張を強調しているのである。このイメージは「国王は兵士の死を心から望んでいないと考えているかもしれないが、本当のところ国王は兵士の血のおかげで生きている」と語っているように思える。

最終連のイメージは性病感染と疫病と死のイメージであり、娼婦の呪いは赤ちゃんの涙を「枯らし(性病感染し)」、結婚を「疫病」で「台なし」にする。この詩の最初の2つの要素がここで繰り返されている。まず、娼婦は売りに出された愛情であり、従って冒頭の2行の「特権なくめ」の世界という自然とは相容れない主題を反復している。第2に、娼婦の声は第二連に具体的なになっている叫びを思い出させるやり方で肉体的な疾病となっている。最後に、結婚は遺体を運ぶ入れ物「柩」であることを強調している。

この詩のイメージを「隠喩的主張」と呼ぶことが出来る。単なる喩えよりも強烈なものであり、この抽象的なものはあの具象的なものであるという主張に至っている。最終連ではブレイクはこの手法を利用して、性に対する社会的姿勢の分析をさらに進めている。この連では性愛を2つに分けている。一方では商品化された粗雑な肉体的喜びと、他方では愛のない、制度化された「結婚の柩」の恐ろしさに分けている。その2つはもちろん相互に関わっている。つまり、利害を優先する愛のない結婚をしている男は売春婦から性を買取り、娼婦は妻になることは望むべくもない。

ブレイクの分析では、社会は男女の性的な関係を可能としている2つの制度、売春と結婚を提供している。この観察眼は、特にブレイクの時代に行われていた見合いによる結婚制度を考えると強い説得力を持ってくる。しかし、ブレイクは慣例的に悪の兆候に満足せずに、その原因を特定することを求め、その根絶を求めていることを見てきた。そこで再び、ここで得た全体像を今まで検討してきた他のテキストの文脈で考えてみることも有益である。これまで批判の対象となってきた悪の陰には内在する原則があるのであろうか。

売春と結婚の断絶は、ブレイクが「破壊しよう」とする分裂、教会による肉体と魂の分離を思い起こさせるかもしれない。「純粹」な愛と冷たい愛（結婚の枢）の不自然な分割、肉体的なものとの汚れたもの（娼婦）の分割は、魂を高く評価し、肉体を否定する教会の教えの結果であるということを提案できるだろう。

煙突掃除の少年の詩では、ブレイクは社会的冷酷さとその冷酷さを容認している偽善的な教会の教えを攻撃目標にしていた。「聖木曜日」の作品では経済的不正と慈善を攻撃し、「愛の園」では教会による愛の抑圧を攻撃対象としていた。この作品「ロンドン」の標的は何であろう。その答えは前記のすべてであり、同時にそれ以外にもある。「煙突掃除の少年の叫び」もこの詩の中で指摘されているし、街頭や自然が同じように「特権づくめ」にされているが、娼婦は性を売り物にし、王宮は他者を犠牲にして支配階級が享受している贅沢を体現しているので、経済的制度に対する全面的な攻撃という文脈の中で語られている。教会の偽善は「すべての黒ずんだ教会」という表現で再度攻撃され、死んだ制度としての結婚に対する攻撃で暗示されているように、より一般的には「すべての呪い」、教会の戒律に対するもうひとつの表現方法で攻撃されている。抑圧、不正、苦難が「弱さのしるし、悲しみのしるし」で再度攻撃されているが、今度はブレイクの展望はひとつの集団、煙突掃除の少年たちや慈善を受けている子供たちに限定されていない。「私が出会うすべての顔」、「すべての声」が対象となっていた。「ロンドン」では苦しんでいる国民全体が引き合いに出されている。国家が国王という人物に代表されて攻撃されているし、その王宮は経済的不正も併せて代表している。さらに、より一般的に言うところ「すべての呪い」は宗教的戒律と併せて国法にも言い及んでおり、結婚は宗教的制度であると同時に、法的、社会的、経済的制度なのである。軍国主義や帝国主義と呼んでいるものも王宮の壁に流れる血潮のイメージで攻撃の対象となっている。ブレイクは戦争の目的は支配階級の贅沢な生活様式を守ることであると語り、名誉や栄光や愛国心を否定している。

まとめると、この章で検討してきた詩作品「ロンドン」と一連の他の詩は政治的、宗教的な組織に対する全面的な攻撃を表している。ブレイクは憤りを喚起したり、煙突掃除の少年たちの運命や貧困の子供たちの自己満足をかき乱すような特定の環境に光を当てるばかりではなく、これらの詩を通して抑圧的社会的基盤そのもの、つまり、資本主義、組織化された宗教、軍事力への攻撃を開始している。ブレイクは誤った基盤に立つ社会の基盤そのものを、つまり、これらに内在する原因を全面的に解消するように求めている。従って、これらの作品は単なる義憤と改革の

作品ではない。根源的な変化を求めているので、革命を促す作品なのである。

ここまでは政治的用語でブレイクの攻撃目標を具体的に列挙する努力をしてきた。これまでの詩の中でブレイクは社会に対する全面的な攻撃を開始していると結論付けることが出来る。しかし、ブレイクは、常にすべての個別的な事象の陰に潜む根源的な悪を特定しようとしていることを明らかにしてきた。そうすることで今までとは異なるアプローチが可能となる。ブレイクがそのエネルギーを傾注している唯一の攻撃対象とはあるのだろうか。この疑問に答えるためにはこれまで読んで、検討してきた詩をひとつのグループとして考え、共通する原則とも言える、普遍的概念の力をもってその作品群をまとめるものを考えてみよう。

ブレイクによる社会批判を考えると、2つ以上の顕著な要点に気づかざるを得ない。まず、教会が全編を通してその存在を示していることに気が付く。ブレイクは教会の影響力に常に変わらぬ嫌悪感を表現しており、その偽善性に激怒している。第2に、本来的な自由と不自然な束縛のテーマがあらゆる詩行に現れている。最後に、目にするすべての悪は経済力に関係している。これらの突出したテーマは、ひとつの結果、つまり支配組織の温存に貢献しているので、もちろん相互に関連している。多分、ブレイクの社会の「ヴィジョン」に関わる最も包括的な表現は詩的な表現であろう。その詩的表現はブレイクが目当たりしていた憎悪する偽善性と奴隷の状態を伝えるばかりではなく、その制度の中に囚われた人々に対する詩人の共感も伝えている。「心が造った鎖」という暗喩にはこの章で見えてきた多くのものが含まれる。つまり、『無垢の歌』の「煙突掃除の少年」の心を締め付けるようなもの見方から、「愛の園」の困惑した語り手と、「聖木曜日」で歌っている貧困の子供たちの「震える叫び」を含んでいる。この考えを完成させるためには、「特権づくめの」、商業主義の世界の助けとなっていることを思い起こしさえすれば十分である。

預言書に向けて

苦難と不正義を際立たせ、ブレイクの時代の社会を攻撃している一連の短詩を『無垢と経験の歌』の中から選んで分析してきた。根本的な原因を特定し、社会におけるこのような基本的誤謬がブレイクの攻撃目標である。これらの詩の情緒的原動力は強烈である。憤怒、苦痛、そして共感。詩を通して我々の現状への満足に異議を唱えている。その時、これらの短い詩は革新的な変化を要求していることが伺える。つまり、無関心な読者に衝撃を与え、現状に対する反逆の戦いに向けて戦友を募っているのである。しかし、腐敗した社会の代わりにブレイクが望んでいる姿に関しては、未だに曖昧な概念しか持ちえないのが現状である。この時点で、ブレイクの肯定的な「ヴィジョン」に関して『無垢と経験の歌』から学んだことをまとめておこう。再度、これまで検討したことを念頭において、特徴的な前向きなテーマを探しながら、包括的なまとめを試みてみよう。そうすることで、預言書において特定し、探求すべき理念の明確な土台を整えてくれ

るだろう。

これまで検討した作品を思い起こしてみると、5つの主要な前向きのテーマの存在が明らかとなる。

1. 自然。自然のテーマは自然の美や風景を遥かに超えたものである。自然はブレイクにとって根源的な重要性を持っている。自然には美と恐怖、あるいは畏怖の念（「虎」に見られるように）を包含している。自然は、植物と動物に加えて、人間の命とその成長の中に想起される（例えば、自然の誤った認知は「失われた少女」ではライカの両親にとっては「心を縛る枷」であり、「愛の園」が墓地に変身している様は反自然的な姿である）。そして、自然には抑圧的な社会体制よりも無限に強大な潜在的力が備わっている（「聖なる木曜日」の子供たちの歌は「巨大な風」に例えられている）。明らかに自然と自然な成長が立派で、肯定的な力として描かれているが、その一方でブレイクが攻撃している社会悪の殆どは、自然を抑圧するもの、あるいは倒錯した自然の概念なのである。

2. 無垢。無垢の世界には前向きの勢力、一種の贖いの力が存在する。しかし「無垢なるもの」がしばしば「惑うもの」、あるいは「無知なるもの」になるので、未だに両面的価値を含む概念である。にも拘らず、ある種の「無垢」は、経験の世界の否定的な監獄のような世界を生き延びることが出来るかもしれない。『経験の歌』の「煙突掃除の少年」の説明しがたい幸福感を見てきた。その少年は自分の悲惨さを理解しているが、幸せな気持ちを持っている。また、ライカとその両親のヴィジョンのおかげで、両親の恐怖が消散霧消していた。「聖なる木曜日」の中では、貧しい子供たちの歌の中でその能力が示唆されている。子供たちの「無垢」とその歌の歓喜は、再度の抑圧された物理的な条件に拘わらず、「天の座」を雷で引き裂いているかもしれない。最後に、『経験の歌』の「序詩」に登場する「詩人」の決意を思い出そう。恐怖と物質主義の夜は「過ぎ」、「朝が／まどろむ塊から立ち上がる」と主張している。この別種の「無垢」が持つ勇氣と楽観主義を大地が抱くなら、希望に溢れた未来を見ることができ、自分を縛る鎖を振り払い力を持つことができる可能性を暗示している。

3. 「ヴィジョン」。本質的な洞察を開示する瞬間をこれまで見てきたし、その際には「心を縛る枷」は解消される。ヴィジョンは実際のところすべての抑圧的な、偽善的な、独善的な勢力を打破することが出来る。これまで見て来たはっきりとしたこの事例は作品「見つかった少女」に物語られている。その時、ライカの両親は突然、獅子の本質は「黄金に身を鎧うひとつの霊」であると察知する。そして、風景や感情やすべての限定的な態度、それらすべてが変容しているのである。『天国と地獄の結婚』の中では「ヴィジョン」の力に関する、より修辭的な説明を学んできた。その理念は、「知覚のドア」が「清められる」ように五官の牢獄（「人間の洞窟の狭い隙間」）からの解放と関連していた。その時、世界は「有限で腐敗した」ものではなく、「無限で聖なる」ものとなる。「ヴィジョン」のテーマは個人の主観的な体験に焦点を合わせている。世界を見る新しい見方は一人ひとりの内面で開花する必要がある。そこでこのテーマは啓示、あるいは想像

力溢れる見方を通して見る一種の自己解放であることを暗示している。

4. 円環的变化。変化を示す象徴の多くは「循環的」象徴と呼ばれているものであることに着目した。昼と夜、四季、植物の成長と死などである。これまで検討した作品の中で、無垢の一日が経験の夜へと移行することは不変であり、避け難いものである（例えば『無垢の歌』の「夜」を参照せよ）。そして幼少時代から青年期、成熟期、老年へと進む人間の生涯と密接に関係している。これまでの検討の中で唯一の不変の「不滅の日」は、作品「夜」の中で両面価値的ではあるが提示されている。圧倒的な形で、これらの詩は連続的な循環的变化の姿を提示しており、このような循環は繰り返されることを示唆している。そこで、経験の世界の夜に入った後で、「序詩」の中で詩人が予言しているように、新しい日が訪れることは自然なことである。一方で、そのことは又、もう一つの夜が訪れることであり、そして新たな一日が始まり、円環が継続することを示唆している。

5. 注目した「円環」との関連で、青年期と老齢期について検討すべきである。これまで見てきた詩作品を想起してみると、高齢と抑圧的、あるいは人を惑わす権力機構を連想させる人物を数多く指摘することが出来る。例えば、「聖なる木曜日」の白髪の不能な寺役人、「こだまする緑」の中で、知識を遠ざけ、幼少期へと子供たちを導く、愚かしい、「白髪の老人ジョン」、そして、「大地の答え」に登場する、大地を「夜に鎖で繋がれた」ままにしている「冷たく白髪で…人間の身勝手な父」がいる。一方で、「子羊」の話し手の純粋な無垢から、「聖なる木曜日」の子供たちに潜在的に秘められた「強烈な」力、そして、『経験の歌』の煙突掃除の少年に見られる手出し無用の幸福観の強みなど、若者は多くの様々な様式で提示されている。明らかに、更なる将来の物語が示唆されている。つまり、白髪の老人には永遠に生き続ける未来はないが、若者がとって代わるのである。しかし、この戦いの結果は未だに決着がついていない。この未来の物語に関するひとつの非常に肯定的な唯一の解釈があった。それは「見つかった少女」の中でのライカによる両親の救いであり、この解釈は『無垢と経験の歌』の現在性を越えた投影である、「未来において、予言的に私には見える…」として提示されている。

ブレイクの預言書は、難解で深遠な作品であるという評判があり、ブレイクの私的な象徴に溢れた神話は確かに読者を混乱させている¹³。これらの作品群は様々な参照と他の文学作品に関する言及、加えて彼独自に創作した象徴的な固有名詞で溢れている箇所が多々ある。しかし、私の立場は次のようなものである。

1. ブレイクの預言書は『無垢と経験の歌』の視点からの理解が有効である。短い抒情詩の理解が、その活用法を間違わなければブレイクの意図を把握することを可能にしてくれる。
2. 預言書の中の要素と文面には研究し、理解できるものがある。
3. ブレイクの象徴を合理的に、選択的に理解し、その預言書からかなりの収穫を上げることが可能である。

『天国と地獄の結婚』の2つの短めの詩行を検討した第二章では、この主張をある程度、実証済みである。本章の最後に、『ヨーロッパ、預言書』と『ユリゼンの第一の書』から長めの詩行を詳細に検討する際に、この手法をより厳密に活用してみよう。

預言書

『ヨーロッパ 預言書』

ここで『ヨーロッパ 預言書』からかなり冗長な詩行を取り上げ、最初の引用詩行として掲載したい。この引用によって、これらの本文に対する足がかりを獲得する仕方を具体的に示し、実際に辿っていく段階的な分析手法を可能にしてくれる。預言書からの後者の引用詩行はより簡潔に、より選択的に扱われることになる。

ここに、『ヨーロッパ』の第10, 11, 12版の全文を提示する。

思い乱れて、彼らは輝く廢墟から起き上がり無言で火の王の
後について行った、しかし王は蛇の形をした彼の年を経た聖堂に行こうとしていた
あの白い鳥伝いにその陰多い全身を長々と伸ばしている聖堂に。
彼のまわりに彼の戦いの雲がうねった、無言で天使は行った、
テムズの無限の岸にそって金色のヴェルラムまで。
そこには神々しい玄関があり高くそびえてその檜の樹に囲まれた柱を
そそり立たせている、柱はどっしりした石でできているが、工具で
刻まれてはいない、貴い石だ、天にあるあの永遠のもののような、
色は12で、地上では殆ど知られていず、暗黒の中で光を発する、
星らの等級に置かれたのは、5つの感覚が大洪水に際して
地上で生まれた人間の上に覆いかぶさった時のこと、次には動揺する目が
二つの動かない円球に変わった、全てのものを一点に集めて。
天の中の天に向かって常に変化する螺旋形のはしご段は
下方に曲げられた、そして鼻孔の金色の門は閉じて
外方に向いた、無限なるものに対しては閉ざされそして石と化して。

思考が無限なるものを一匹の蛇に買えた、憐れむものを、
舐め尽くす炎に、そして人間はその面前から逃げて
夜の森に隠れた、次にすべての永遠の森が空間の円となって
回転する地に分かれた、それは大洋のように突き進んだ

そしてこの肉という有限な壁を除くすべてのものに覆いかぶさった。
次に蛇形の聖堂に作られた、無限の姿が
有限の回転の中に閉じ込められたのだ、そして人間は一人の天使になった、
天は旋回する一つの巨大な円に、神は冠をいただいた一人の暴君に。

今やあの遠い昔の守護者が南の玄関に到着した、
そこは最も黒ずんだ葉の木々が植えられており、そして薄暗い
谷の中に、夜の石を囲ってあるところ、はすかいにそれは立っていて、紫の
花と真っ赤な果実に覆われていた、あの快い南の姿は、
かつては天に向かって開いており人間の頸の上に高くなっていたが、
今は一面に毛が生えており石の屋根で覆われている、
下方にそれは沈められていて引力を持つ北の下になっている、北は足のまわりに
荒れ狂う渦となっておりこのふらつく尋問者を彼の墓に引き寄せせる、

アルビオンの天使は夜の石に立ち上がった。
彼は大西洋上にユリゼンを見た、
そして彼の真鍮の書を、
それを王たちと聖職者たちは北から南へ
広がっている地上で写し終えていた。

そして雲と火が青白くぐるぐるとエニサーモンの夜の中をうねった
アルビオンの断崖とロンドンの壁のまわりを、依然としてエニサーモンは眠っていた。
うねりゆく大量の灰色の霧が教会を包む、宮殿を、塔を、
というのはユリゼンが彼の書の留め金をはずしたからだ。
彼の魂を養うのに憐れみをもってしながら
イギリスの若者たちは心痛している天を暗がりに隠れて呪う、アルビオンの
天使の姿を見るために死のような夜の中に入ることを余儀なくされて
彼らの親たちが彼らを生んだ、すると年老いた無知がもったいぶった口調で説教する。
巨大な岩の上に、思考から閉ざされているあの感覚によって知覚されるのだが、
寒々と、暗く、不意に、それは立ってロンドンの町に影を投げかける
彼等は岩上の骨ばった足を見た、肉が炎に焼き尽くされたのだ、
彼等は高くそびえている蛇形の聖堂を見た、白い島に影を投じているのを、
彼等はアルビオンの天使の声がオークの炎の中で吼えているのを聞いた、
最後の運命のラッパを求めて

他のものにましてその吼え声はウェストミンスターからいやましに高く聞かれた、
秘密のおきての守護者は彼の年経た邸宅を捨てた、
オークの炎によって追い出されて、彼の毛皮の長衣と偽りの頭髮は
へばりついて彼の肉と一つになった、そして神経と血管がそれらを突き破った
陰うつな苦痛のために青ざめて風にすがりつつ、彼は逃げた
大ジョージ通りを腹這いながら行き公園の門を通して、すべての兵士が
彼の視野から逃げた、彼は彼の苦痛を荒れ野まで引きずって行った。

このようにこの吼え声はキョーロッパ中を貫いた！
というのはオークが吼える影たちの声をきいて狂喜したからだ
しかしパラマブロンは彼の電光を放って彼の広い背中を切り裂いた
そしてリントラはすべての彼の軍団と共に下の深みの中を低回していた

エニサーモンは彼女の眠りの中で笑った（おお女の勝利よ）
あらゆる家を洞穴と、あらゆる男を縛られていると見て、それらの影は幽鬼たちで
満たされ、そしてそれらの窓は全面が鉄の呪いをもって編まれている、
扉一面に汝がすなかれと、そして煙突一面に恐怖と書かれている、
鉄の輪を頸の周りにかけられて壁に深く固定されている
市民たち、鉛の足枷をかけられて市外の住民たちが
重く歩く、柔らかくそして曲げられているのは村人たちの骨だ

ユリゼンの雲の間をオークの炎が重くうねる
アルビオンの守護者の手足のまわりを、彼の肉を焼き尽くしながら。
吼え声としゅっしゅっという音、悲鳴とうめき声、そして絶望の声が
彼のまわりアルビオンの雲の多い天に起こる。¹⁴

上記は長い詩篇からの引用であるので、最初に物語全体の一般的理解が必要となる。作品『ヨーロッパ』の表題のページには1794年と記されている。読者が目にして詩行は2つの歴史的出来事に挟まれている。最初の出来事はアメリカの植民地が英国に勝利し、独立を勝ち取ったアメリカ独立戦争である¹⁵。2番目の事件は、1789年から1793年にかけてフランスで起きたフランス革命とその後の出来事である¹⁶。

ブレイクが英国の支配階級と英国国教会を憎悪していたことは分かっている。『無垢と経験の歌』の中では独裁者として描かれていた。そして上記の引用は、権力機構に対するブレイクの敵

意と、英国民が抑圧者（国王、王女、国会、英国国教会）に反抗するようという彼の願望を継続的に表現している。この引用は英国の支配階級の物語であり、アメリカの植民者たちの手による彼らの敗北と、フランス人が王政をひっくり返し、支配階級を処刑し、ヨーロッパ全体に自由の旗が掲げられた時代の期間の物語である。ブレイクの見方では、英国政府はアメリカ人の手によって警告を受けていた。彼らの軍国主義は破綻し、自由が勝利を収めていた。アメリカにおける敗北に続いて、議会の天井は、政府全体の上に崩れ落ちているとブレイクは想像していた（「一刻を彼等はあの大広間の廢墟の下に埋まって横たわっていた、／しかし星々が塩からい湖からのぼるにつれて彼等は苦しみのうちに立ち上がる…」『ヨーロッパ』9版）。本引用の一行目「思い乱れて、彼らは輝く廢墟から起き上がり…」は英国政府のことを述べている。

ここは引用部分の歴史的経緯について語っている。しかし、この詩行での出来事を掌握するにはもう少し情報が必要なことは明らかである。例えばブレイク独自の固有名詞が数多く登場するが、その意味するところは理解されていない。初心者の読者にとって、すべての固有名詞の意味の確認が必要になるのはこの時点である。しかし、まず詩行に対する理解を深めることが必要不可欠であるという重要な段階にある。しばらく参考文献を閉じたままにしておいて、今のところは混乱をそのまま受けとめておこう。

この助言には2つの最もな理由がある。まず、この引用詩行にはブレイク独自の固有名詞がいくつもあるが、現在のところ誰が最も重要な登場人物なのか判然としていない。それらをすべて調べると、参照事項で心が取り乱され、その項目のいくつかは当面の引用には関連のないものもある。この点を例証するために、パラマブロンに関する以下の説明を見よう（引用詩行の59行目を参照せよ）。

パラマブロンは被抑圧者に対する憐憫を象徴しており、『ミルトン』ではサタン的なヘイリーと対立しているブレイク自身の役を演じている。エニサーモンはパラマブロンをイエスの子孫である度量の広いジュダに例えている（『ジェルサレム』93：14）。彼は悪魔の中では最強の者ではあるが（『ミルトン』7:47）、「穏やかで信心深く」、「性格の良い者」である（『ミルトン』24：11；『4つのゾア』viii:391）。彼の立ち位置は東であり、ルーバとロンドンの下に位置している（『ジェルサレム』74：3）。しかし、ゾアが位置を変えると、パラマブロンは西に移動している（『ジェルサレム』54、図版）¹⁷。

上記はブレイクの参考文献における「パラマブロン」の項目にある6つの解説内容の最初のひとつである。初めての読者は、言及されている他の固有名詞の数に困惑してしまうことになる（ヘイリー¹⁸、エニサーモン、ジュダ、ルーバ、ゾア¹⁹についてはこれまでの研究では全く触れてはいない）。また、この専門家は『ミルトン』、『4つのゾア』、『ジェルサレム』の三つの詩に言及しているが、これまでの検討ではそのいずれにも言及したことがないことにも注意したい。従っ

て、参考文献を参照すると、理解していない多くの固有名詞で頭が混乱してしまうだろう。その上、『ヨーロッパ』でのパラマブロンンの役割について何の知識も得られていない。

第二に、我々は引用した詩行自体の意味を捉えようとしているのである。その詩行の働きに焦点を合わせることでそれが達成できるのである。参考文献で調べた情報は実体のないラベルでしかないので、容易に読者の心から漏れてしまう。一方、詩においては物語を語る具体的なイメージリーを通して学んでいく。つまり、イメージリーは読者の心に定着するのである。加えて、『無垢と経験の歌』から多くの洞察を持ち込んでいることを思い起こして欲しい。参考文献に助けを求めるよりは、これまでの洞察の上に理解を深めるならば、結果として我々の理解内容はより確固としたものとなる。

詩行自体に出来る限り働きかけることによって検討を始めよう。「登場人物」を一人一人検討し、引用本文中における登場の仕方から出来る限りの情報を収集しよう。

[1]「炎の王」は2行目に登場する。前後数行の意味から考えると、この王は4行目の「天使」と同一人物であることは明らかである。そしてこれは24行目の「守護者」、32行目の「アルビヨンの天使」と言及されている人物に違いない。固有名詞それ自体を検討することから始めよう。「アルビオン」は英国の古代の名称であり、『天国と地獄の結婚』の中では「天使」はブレイクの世界では独裁者の一人であり、偽善に満ちた教会に支配された偽善者である可能性がある。これらを総合的に考えると、その人物は「英国の独裁者」の一人ということになる。この理解は物語の冒頭と合致することになる。政府の構成員は崩壊した議会の廃墟の中から這い出して、「どこまでも続くテムズ河岸からヴェラム」に沿った英国の様々な場所へと自分の王、あるいは指導者についてゆく（ヴェラムは今日のセントアルバン近くのローマ時代の遺跡であり、昔から宗教的な中心地であった）。これ以上に具体的に詮索する必要はないが、ブレイクは議会の指導者（首相であるかもしれないが）と「王」と宗教的要因（ヴェラム、しかし、彼は「自分の古代の神殿を求めていた」という事実も含めて）からこの人物を編み出していることに注目すべきである。従って、アルビオンの天使（「炎の王」と「天使」共に）は、君主制と国家と英国国教会を含む英国政府の指導者なのである。

ここで引用詩行を検討してみると、この物語の中で「アルビヨンの天使」が果たしている役割が明らかになる。この人物は何をしているのだろう。まず、2-23行では彼はヴェラムへと向かい、求めていた「蛇の姿をした古代の寺院」を見つける。この部分の話の最後にブレイクは次のようにまとめている：

次に蛇形の聖堂に作られた、無限の姿が
有限の回転の中に閉じ込められたのだ、そして人間は一人の天使になった、
天は旋回する一つの巨大な円に、神は冠をいただいた一人の暴君に。

『天国と地獄の結婚』の中でブレイクは、事物は「無限で聖なる」ものであることを求めていた、従って「無限なるものを、…有限なるもの」、あるいは限られたものにしていく「蛇の神殿」は、否定的な存在であるに違いない。『天国と地獄の結婚』と『無垢と経験の歌』から学んだ知識では、「天使」は教会の大きなうその一部であり、国民を欺き、抑圧していると語っている。この考えを先に進めると、「天国」、つまり「天使」が棲むところは支配階級が横暴に振舞っている、贅沢と宮殿で満ちた世界を表わしていると推測することが出来る。従って天国は壮麗な屋敷と宮殿であり、権力の場である。この詩行の「神」は明らかに以前に会ったことのある抑圧的な独裁者であり、本物の神ではなく、自分たちの権力を維持し、その反自然的な律法を正当化するために虚言を語る聖職者によって造られた神である。そこで「冠を頂いた独裁者」となる神の中に、「煙突掃除の少年」の中で会った権力体制（国家、国王、教会）の様々な部門に見られた、同一の不公平で冷酷な協力関係を認識できる。つまり、「ぼくたちの惨めさで天国をつくっている／神さまや坊さまや王さま」なのである。この「蛇の神殿」の形成期に物理的感覚は、他のすべてを圧倒してしまい、人々は「夜の力」の中へと逃げ込んでしまった。『経験の歌』と『天国と地獄の結婚』から抑圧のこの姿の多くを確認することが出来る。ブレイクは再度、恐怖に支配され、物理的感覚に限定され、ヴィジョンを奪われた腐敗した世界を描いている。

次にアルビヨンの天使は「夜の石」を見つける。26-31行目にかけて、この「石」に関するある観念を得ることが出来る。その石はかつて「天国に開かれており、人間の頸の上に上げられていた」と読むことが出来る。しかし今では沈み、「石の屋根」となり、頭髮が生えていた。このイメージは人間の頭脳を示唆しており、その頭脳は昔は開かれており、現在では閉じられており、石の下に閉じ込められているとブレイクは語っている。これは「柵に囲まれ」、「化石化した」感覚のイメージであり、それは限界と投獄と抑圧の更なるイメージなのである。南と北は反対方向なので、この方角はこの詩行では読者を混乱させるかもしれない。しかし、これまでの全体像は抑圧的な「天使」と「天国」というブレイクの特徴的な皮肉を含み、邪悪と誤謬からなっているので、コンパスも逆転していることに驚くべきではないだろう。

次にアルビヨンの天使は「夜の石」（換言するならば、投獄された知性）の上立って、書物を開く「ユリゼン」と呼ばれる人物を見ている（32-6行目を参照）。引用の詩行中の残りの出来事の殆どは、この「ユリゼン」に加えて「オーク」と「エニサーモン」と呼ばれる登場人物が関連している。恐怖と抑圧に関する更なる展開があると思える。例えば、「イングランドの若者」が、石の上に立っている天使が体現する恐ろしい支配を目の当たりにしている41-45行目を見てみよう。また、62-67行目の抑圧の姿を見てみよう。そこでは「ドアの上には‘汝なすなかれ’、煙突の上には‘恐怖’と書かれて」おり、『経験の歌』の「ロンドン」の中で会ったイメージを再確認することが出来る。

アルビヨンの天使自身と関連する苦痛と恐怖という要因を見出すことができる。例えば、岩の上での彼の骨ばった足は「肉が炎に焼き尽くされ」ており（46行目）、彼は「オークの炎の中で吼

えて」いた(48行目)。最終行で、「ユリゼンの雲の間をオークの炎が重くうねる／アルビオンの守護者の手足のまわりを、彼の肉を焼き尽くし」ている、そして苦痛と絶望の響きが「アルビオンの天国」に溢れている。この「天国」とは法廷と宮殿であることを思い出しておこう。つまり、英国政府はこの引用詩行の最後で攻撃と戦いに晒され、支配力を失い、不安定な状態にあることを示唆していることは明らかである。

この引用詩行におけるアルビオンの天使の物語をここまで辿ってきたので、要約しておくことも有効であろう。これまで学んだことを簡潔にまとめると次のようになるだろう：英国の支配階級はアメリカでの敗北からの動揺の中で立ち上がり、その支配を再構築し、国民を抑圧するために古代からの宗教を利用している。しかし、引用詩行の最後には「全ヨーロッパ」で燃えている焰は英国の支配階級を脅かし、燃え尽くす勢いである。

引用詩行の最後の部分で現れる「焰」は、フランスや他のヨーロッパ各地での革命と政権転覆に言及していることは間違いない。英国政府が独裁と宗教上の抑圧という古い武器で戦いながら、政権転覆を脅かすヨーロッパからの革命の盛り上がりに対抗しつつ、自らの権力を維持しようとしている姿をブレイクは描き出している。

[2] ユリゼン。この人物は、アルビオンの天使が夜の石に登る時に姿を表わす。「ユリゼン」の人物像を形成するために再度詩行を検討してみよう。まず、ユリゼンは「王たちと聖職者たちが地上で写し」た「真鍮の書」を持っている。煙突掃除の少年の「神と聖職者と国王」を思い起こすと、ユリゼンは結果として「神」の役割を果たしていると推測することが出来る。ここでも『経験の歌』の詩作品の分析を思い起こしてみよう。ブレイクが意図していた「神」は本当の神ではなく、教会が用意した年老いた利己的な独裁者であり、幼児奴隷を容認し、聖職者に「私の歓喜と欲望」を束縛するように命じている人物なのである。これは、「序詞」と「大地の答え」の中で、大地が恐れている神と同じ人物なのであることを確認した。アダムとイブを呪い、罰を与え、大地によって「冷酷で、嫉妬深い、利己的」と呼ばれた創世記の怒れる神なのである。

この理論を現在までに引用した詩行で裏付けることが出来るだろうか。関連する詩行を再度調べてみると、ユリゼンには「うねりゆく大量の灰色の霧」となって、「心痛している」人々を覆い隠している「青白い雲と火」がある。引用詩行の最後で、「ユリゼンの雲」はアルビオンの「雲に覆われた／天国」と関連付けられている。これは神秘的な印象、盲目さを伝えており、「灰色の霧」によって老齢（「年老いた無知がもったいぶった口調で説教する」権力体制のイメージで裏付けされている）を示唆している。これまでの推測は正しい方向へと導いている可能性が高く、「ユリゼン」は年老いた、白髪の冷酷な独裁体制、つまり、かつて国民を恫喝して従わせていた、厳しい戒律の神を意味している可能性が高い。

[3] オーク。オークはこの引用詩行の中では最もよく分からない人物である。彼が登場すると必ず焰と関連付けられている。彼がユリゼンとアルビオンの天使、両者の敵であることは明白である。天使は「ユリゼンの雲」と「オークの焰」に挟まれている。オークの焰は独裁的な天使を

燃え尽くし、支配者階級の宮殿（「雲に覆われた／アルビオンの天国」）にあらゆる恐怖（「吼え声としゅっしゅっという音、悲鳴とうめき声、そして絶望の声」）を振りまいている。オークはヨーロッパ全土の支配者階級からの苦痛の叫びを聴いて、「歓喜」していたことに注目してきた。従って、オークは支配者階級を憎悪する革新的なエネルギーであると推察することが出来る。

〔4〕 エニサーモンは女性であり、眠っている。この引用詩行からは彼女について多くを語ることは出来ないし、この女性の固有名詞も大きな助けにはならない。この状況の下で、彼女は単に葛藤の中にある。61-67行目に赤裸々に描写されているように、抑圧された社会を見て「眠りの中で笑っている」ので、エニサーモンは明らかに抑圧者と仲間である。

〔5〕 パラマブロン。パラマブロンは「自分の」広い背中を攻撃しているので、この人物の立ち位置、あるいはどちらに与しているのかは何も分からない。しかし、「彼」がオークであるのか、あるいはオークが攻撃している「守護者」であるのか確信を持つことは出来ない。

〔6〕 リントラ。リントラの立ち位置もはっきりとはしていない。彼には軍事的な連想があり、軍団を持っているが、まだ戦闘に参加してはいない。

これまでの検討で、引用詩行におけるそれぞれの人物の人物像と行動の姿を、詩行を活用して築き上げてきた。イメージアリーを解釈して利用し、例えば「灰色」は老齢を暗示し、「霧」は明解な真理の光明を覆いつつ、神秘性を示唆していることを示している。このような接近手法は物語の全体像とその支配的なテーマ、つまり独裁的な抑圧と荒々しい革新のエネルギーとの葛藤というテーマの把握を可能にしてくれる。その意義が推測できない二人の人物（パラマブロンとリントラ）と、殆ど何も分からないもう一人の人物（エニサーモン）がいる。その一方で、「アルビオンの天使」が何を表わしているのかは理解できたし、ユリゼンとオークに関しては納得のいく理論を打ち立てた。

参考文献を活用する時期にきたようだ。しかし、この引用部分に関しては、ここまでで理論として発展させてきたユリゼンとオークの解釈を確認するに留めたい。ユリゼンは嫉妬深い、利己的で冷酷な権威者、人を束縛する律法と恐怖で支配する独裁体制を意味すると提案してきた。『無垢と経験の歌』の検討を通して、この種の「神」は肉体と靈魂を切り離し、性を憎悪し、禁止して肉体を悪者扱いをしていることも学んだ。『ユリゼンの書』²⁰に関する K. P. & R. R. Easson による評論の中で、「ユリゼンは敵対するものであり、ユリゼンを通じて、無限の知覚への道を曖昧にし、妨げる誤謬に溢れた現実像を作り出す理性に支配された心とその現実のあらゆる過ちを、ブレイクは具体的に示している（67ページ）」。研究者は続けて語っている。「敵対者ユリゼンの歴史は宗教の歴史、特にユダヤ・キリスト教の歴史の中に具体的に列挙されているとブレイクは考えていた。キリスト教神話の根本的な過ちは、人間の墮落に関する物語であるとブレイクは考えていた。…ユリゼンは墮落した神であり、墮落の神であり、自分の「宗教の綱」を用いて墮落を永遠に存在させている（70ページ）」。この指摘はユリゼンに関するこれまでの概念を深めてくれるものであり、彼に関するこれまでの理論を追認してくれる。ユリゼンは抑圧的な反動勢力で

あり、不従順ゆえにアダムとイブを呪う独裁的な神、「大地の答え」に登場する大地という嫉妬深い抑圧者、そして煙突掃除の少年の惨めさの中で「天国をつく」っている冷酷な詐欺師と繋がっている。

オークはフランスの革命的な盛り上がり、確立された支配者階級の安定を脅かす自由を求める勢力と結び付けてきた。この名前を調べると、「オークは物質世界の革命である。彼はルーヴァの下方の姿であり、感情を表わす。そしてユリゼンとオーク、つまり慣例と反逆の関係は対立物の関係であり、その対立なくして進歩は不可能である。その争いは辿るとユリゼンとルーヴァの最初の対立関係に戻る。ユリゼンはルーヴァを押さえ込むことによって、「オーク」という物理的反撃の下部の姿に押し込めることが出来る。…」²¹この解釈は、オークは革命的な勢力を表わすというこれまでの推測を確かに確認してくれる。つまり、彼の「焰」は、結局は反逆という破壊的な暴力なのである。ここで再び、参考文献を参照することで、ユリゼンとオークは「対立的存在」であるという概念が導入されたので、理解を深めることが出来た。彼ら二人はひとつの全体の部分であり、これまでの引用詩行全体を覆っている二人の葛藤は、進歩へと繋がる闘いなのである。

その一方で、オークとユリゼンを調べると他の固有名詞、これまで出会ったことのない人物ルーヴァに言及が及び話が複雑になってしまっている。ルーヴァの登場は明らかに混乱を引き起こすが、彼は「感情」を表わしており、いつの間にかオークに変身するのである。この辺の事情がブレイクの神話の特徴であり、読者には理解が難しいことがしばしばある。つまり登場人物がその名前を変え、別の人物に変身するのである。語られているようにルーヴァはオークに変身するのである。しかしながら、登場人物がお互いに入れ替わる理由を理解すれば、そのシステムは理解し易くなり、ブレイクの意図を今まで以上に深く理解できるようになる。その答えは次のように単純なものである。つまり、ブレイクの固有名詞は状態に関する名称なのである。意識、展開、知覚の状態を表わし、個別の個人の名称ではないのである。そこで人物が一つの意識の状態から別の状態へと移動すると、その人物の名称が変化するのである。實際上、人物の一部、個性の一つの側面にはその側面、その精神状態を表わす名称があるのである。従って、読者は柔軟性を持って、人物間の、そして状態間の変容についてゆく備えをしていなければならない。読者は、このような変化の姿とその理由を理解することでより深い洞察を得ることが出来る。

これまでの検討では、この詩における登場人物は、何が起ころうとも自分の固有名詞を維持している人間のような存在であると仮定してきた。このような解釈を機械的、あるいは静的解釈と呼べるだろう。しかし、ブレイクの方法は静的なものではない。ブレイクの方法は動的なものであり、相互に影響しあっている勢力と反勢力(例えば、ブレイクが「対立物」と呼んでいる一対の概念である)に関する概念である。その概念には葛藤があり、その関係性は変化し、更なる変容と変化、そして更なる対立関係へと繋がる結果をもたらすのである。そこで、これまでにしてきたようにユリゼンやオークの「人物像」を把握しようとするのではなく、更なる段階に進む必

要がある。ユリゼンとオークの戦いは全体のサイクルにおける一時的な部分でしかないので、活力溢れる全体像を理解する必要がある。

この物語の重要な一部を見ることの必要性がより鮮明になったのである。ブレイクのもっと普遍的な人物、ロスについて語ることから始めよう。ロスはブレイクの神話において非常に広範にわたり、そして包括的な意味で代表的な人物である。彼は「詩」、「人間の想像力」あるいは「預言者」と呼ばれることがある。ロスは人間味溢れ、根本的には善なる存在であり、「普通の人間」あるいはブレイク自身と同一視されることがしばしばある。それから彼は全体的な、多面的人格を持っている。ロスの一つの要素は理性、あるいは分析的な思考である。理性は理解を可能にする重要な能力であるが、理性は支配的な立場に立つべきではないのである。もし理性が支配するならば、想像力とヴィジョンは囚われの身となる。ブレイクの物語はここから始まり、次のように展開してゆく。

ロスの理性は過ちを犯して墮落し、統一性ではなく二重性の存在を信じるようになり、肉体と靈魂を弁別するという基本的な過ちを犯した。理性もまた自らが唯一の真理であると信じるようになり、ヴィジョンや想像力を含む他のあらゆる真理を破壊したり、その自由を奪おうとしたのであった。そうすることで理性は、最高の権力を持って支配することが出来たのである。それからロスはユリゼンを創造した（ある意味で命を与えた）のであり、自らをあらゆるものの上に置くとき、理性の横暴がもたらす過ちと同意義になる。その時、ロスはユリゼンを時間と物質世界の内に拘束し、永遠界と無限性から切り離したのである。

これがこれまでの明白な事情に関するまとめである。すべてのこれまで出会った「ユリゼン流の」登場人物は、「大地の答え」の「嫉妬深い父」であろうと、『ヨーロッパ』の雲の中の独裁者であろうと、無限性が理解できない、単なる物理的な五官の狭い「割れ目」の中に閉じ込められた物質主義者なのである。これが、支配することに拘泥するロスの一側面としてのユリゼン誕生の経緯なのである。

オークの物語もルーバという一層広範な、包括的な人物と一緒に、同じような起源を持っている。ルーバは愛を体現し、預言書の多くの箇所イエスと関連づけられている²²。ここではルーバの両親やその初期の物語については触れない。やがてルーバはユリゼンによって押さえつけられ、彼は溶解して一片の雲、抑圧された欲望の陰となってしまう。この経緯は複雑な印象を与えるが、心理学的には明確に道理にかなっており、『無垢と経験の歌』を通して学んだことと一致する。大地の「縛られた自由な愛」と聖職者が「歓喜と欲望を茨で縛っている」「愛の園」において、ユリゼン的な権力によって愛と欲望は抑圧されていた。従って、愛と欲望は曖昧で影のような無意識的存在となることは、当然の結末であると言うことが出来る。しかし、ルーバは同時に普遍的な人物の一人ロスの一部となるのである。その物語は続き、抑圧された後にルーバはロスの子として生まれ変わるのである。抑圧された愛は、その対立物である憎しみに変容するという明白な原則に基づいて、オークは反逆的な憎悪と怒りで溢れているのである。ユリゼンによる

抑圧の結果として、ルーバ（愛）の新たな再来としてオークはこのように生まれてくるのである。

これまでの3つの引用詩行を通して、預言書の神話的物語を拾い読みしてきたことになる。これらの作品は複雑で難解な部分もあるが、ブレイクの3つの最も長編の作品、『ヴァラ：4つのゾア』、『ミルトン』、そして『ジェルサレム』を更に研究し、そして、参考文献や批評家に関してより幅広く研究すると実に多くのことを発見することができる。重要な要点は、その神話の一つ一つの部分が人生に関する一つの洞察を伝える働きの姿を認識することである。そのおかげでブレイクの預言書が、読者にとって生き生きとして意味深いものとなってくるのである。

ここでユリゼンとオークとの対立関係を検討してみると、より平明な言葉で言い換えることが出来る。神話が明らかにしている皮肉的ではあるが鋭い真実に着目してみよう。例えば、ブレイクは独裁が革命を生み出すことを示している。ユリゼンがますます独裁的になると、人々の怒りは増し、独裁者への憎悪は深まり、人民の敵であり、捕囚者である権力を破壊する炎を燃やすのである。このことは政治学上の真理、残虐な政権は反乱を生み出すという真理を簡明にまとめている。また、オーク誕生の物語は、心理的プロセスを効果的に伝えていることにも着目したい。つまり、権力への暴力的な憎悪や、父親に対する殺意を含む感情はその人の性癖の一部となることがあるが、その人の自然な愛の扱われ方に多くが依存している。欲望が秘められるまで抑えられ、満たされずに、罰を与えられると、欲望が無慈悲にも抑圧されて無意識なものにされるなら、その点でそのエネルギーは変容して他のものになる。その自然な捌け口が抑圧され塞がれているため、歪曲された破壊的なエネルギーがその感情の唯一の捌け口となる。このように、「オーク」と呼ばれる暴力的で燃える憎悪が、社会の中で、そして個人の内面で生まれるとブレイクは語っているのである。

これらのことは人間に拘わる真実であり、単なる神話上の抽象的な概念ではない。「誕生」と人物の相互への変身は、社会と個人の内面での動的なプロセスへの隠喩である。神話が実に表現力が豊かであることに注目し、その神話と人間界の周囲の世界での経験と比較しながら、人生に関連付けることを忘れない限りは、興奮と感謝の念を持ってブレイクを読み続けることが出来る。

『ヨーロッパ』からの引用詩行を、その物語とテーマの理解を深める中で検討することから始めた。この結果、ブレイクの神話世界における主要な構成要素のひとつ、「オークサイクル」と呼ばれている循環に直面することになった。ここで、引用詩行自体に立ち戻り、これまで以上に詩行に沿ってこの詩作品を検討してみよう。

この引用部分は『無垢と経験の歌』とは異なる種類の詩であることは、確かに明白なことである。そこには韻律も、押韻もないし、連の形式もない。物語の動向、視点の変化、あるいは主題の変更によって、詩行は長めの、あるいは短めの「段落」にグループ分けされている。詩行はその長さの点でも同じではない。この詩行はどのような種類の詩なのか？その効果はいかなるものなのか？

『ヨーロッパ』からのこの引用詩行は長めのものであり、イメージと象徴で溢れており、その

すべてを詳細に検討する物理的余裕はない。従ってここでは二つの一節のみを検討しておこう。それは限定的で物質的感覚の「創造」、それ故に有限の物質的世界について語っている10-20行目の部分と、ユリゼンとアルピオンの天使による人類の隷属、換言するならば、1793年の英国社会に対するブレイクの見解について説明する61-67行目の部分である。

10-20行目には困惑するイメージの羅列が見られる。以下がその一覧表である。

1. 五感が「大洪水」、あるいは「洪水」に例えられている。
2. 二つの「球体」が静止した眼球に例えられている。
3. 螺旋形に例えられた天国への道。
4. 開かれた、あるいは閉じられた鼻腔という「黄金の門」に例えられた嗅覚感覚、あるいはその欠如。
5. 格子で囲まれ石と化した門と、「黄金」に例えられた閉じられた無限界。
6. 無限界から理性が創り上げたものが、蛇に例えられている。
7. 焼き尽くす焔に例えられた憐憫。
8. 「夜の森」に例えられた有限界における人間の避難場所。
9. 空間とさらに波立つ大洋に例えられた個別の避難所間の裂け目。
10. 洪水に耐えている壁に例えられた肉体の皮膚。

この一覧表を検討してみると、これらのイメージは3つのグループに分けられると提案できる。まず、大洪水、焔、森、波立つ大洋という荒々しい自然の猛威がある。第2に、「螺旋状に上昇」し始め、蛇に変身する渦巻きと螺旋形のイメージがある。最後に、第三のイメージのグループは人の手で造られた硬いもの、球体、門（黄金で造られ、それから石で造られた）、柵、そして壁に言及している。

自然の猛威からなる最初のグループは勢いと危険な存在を伝えている。これらのイメージは作品「虎」、あるいは『無垢の歌』に登場する少年が道に迷った暗い森を読者に想起させるかもしれない。'whelmed'という盛り上がるような言葉遣いと'ocean rushed'の歯擦音の韻は、消滅の危惧の念を与える恐ろしい自然の猛威を提示している。しかし、『無垢と経験の歌』の読解を通して、自然の恐怖は一つの偏った見方に過ぎないことを学んできた。無限性とエネルギーに恐れている経験界の見方に過ぎないことを。球体、門、壁のようなしっかりとした造られた物からなる第三のグループは、荒々しい自然界への一つの解答であり、対峙しがたい、あるいは制御しがたいものを排除しようとする断固とした試みである。

イメージラリーにおけるこのような対照を用いてブレイクは、彼の抽象的物語に具象的な特質を巧みに与えている。偉大な自然の猛威は、無と化す恐怖を人間に喚起する。壮大な洪水に飲み込まれないようにと壁を建設し、門に鍵をかける必要性には共感できる。同時に、黄金、石、壁は堅固で冷たい存在である。そうして、「肉体の壁」という堅牢・柔軟、死・生という並列にはどこか違和感が、何か不自然な感覚が残る。ブレイクは'finite'という単語を加えることで批判的立

場を示唆している。そこではこのイメージは読者の共感をこの対立関係の両サイドに向けており、作品「虎」と「大地の答え」が提示している複雑な事情を思い出さざるを得ない。つまり読者は自らの恐怖の彼方に目を向け、恐怖感を克服するヴィジョンを持たねばならない。同時に、恐怖は実際に存在するので、生の恐怖に負けないためには桁外れの勇気が必要となる。

天国への道へと繋がっている螺旋と渦巻きの共通の形状において、限られた思考を表わす蛇の閉じられた渦巻きの形で、ブレイクはその対立物への変容を可能にしている両面価値的な姿を創造して来た。これは二つの他の対照的な集団の間に立っているように思える逆説的なイメージである。

ブレイクの預言書におけるリズムと文体を定義することは難しい。重々しく熱弁をふるっているような声を耳にすることがある。その一方で、一貫性のある修辞法をその中に特定することは難しい。実に多くの点が、効果的に組み合わせられた単語と響きあっている語句に依拠しているように思える。これらの詩行における、'fluxile eyes'の母音韻、'concentrating all things'における多音節語と単音節語の対照、そして、'rolling circles of space'における頭韻を伴った音の転調に注目したい。

多くの構成は古典的な秩序の元で構築されている。例えば、'then turn'd the fluxile eyes / Into two stationary orbs'や'that like an ocean rushed'を検討してみよう。このような表現はその言い回しに形式的な印象を与え、長い語句や響きあう語調を伴って、欽定訳聖書で見られるような聖書的な詩歌を思い起こさせている。もうひとつの聖書的な特徴は対句法、つまり言い換えの語句を伴う反復構成法である。例えば、'Thought chang'd the infinite to a serpent, that which pitieth / To a devouring flame'にその特徴が見られる。また、対句法はブレイクの理念によく合致していることにも注目したい。一つの出来事や行動が複数の結果を生み出すことがしばしばあり、同時に様々な異なる方法で明らかになっている。

引用箇所2番目の詩行は多くの対句的な表現を含み、このような文体上の傾向をはっきりと示している。ここは惨めな抑圧の描写であり、いくつかの要素は『経験の歌』を読者に想起する。しかし、そのイメージは再度読者に最も強烈な印象を残す。ここでブレイクは監獄と金属のイメージを広範に使っている。'bound', 'wove...iron', 'bands of iron round their necks fasten'd into the walls', 'leaden gyves'の様な表現は暗い、鈍い光を放つ金属で囲まれた束縛という暗く具体的なイメージを生み出している。

『預言書』におけるブレイクの詩に見られる自由な詩形にも拘らず、彼の短い抒情詩に提示されている簡潔で完成されたスタイルを忘れてはいけない。『預言書』の作品においても同じような効果的な単語の並べ方、あるいは効果的なリズムと調子の変化を見出すことがしばしばある。これらの詩行の中で、例えば詩行の最初に二つの突然の強勢へと導いている、繋がっている詩行'...in leaden gives the inhabitants of suburbs / Walk heavy...'の配置の仕方に注目したい。この表現法はリズムの面とその意味の面においても、その詩行の冒頭に動詞と二つの強勢を配置し

て、国民の抑圧に贖う努力を強調している。同様に 'Thou shalt not' の3語も、「愛の園」でそうであったように、ここでも強勢が置かれている。しかし、対句表現である 'Over the doors "Thou shalt not", & over the chimneys "Fear" is written' では、2番目の対句は長い開放型の強勢 'Fear' でクライマックスを迎えている。従って、ブレイクの詩的技巧に配慮せずに『預言書』を読むことは誤りである。その演説調の自由詩の形式にも拘らず、これらの作品にはリズム、多様な調子、音韻効果、そして鮮明な具体的なイメージャリーが豊富に見られるのである。

『ユリゼンの第一の書』

次に検討する『預言書』からの引用箇所は、ロスによって創造されたユリゼンを描写している。ロスは包括的で普遍的な人間的な人物であり、「詩」あるいは「予言」として知られていた。その物語はロスの理性が制御不能となり、他のすべての能力、ヴィジョンや想像力を奴隷化する脅威となっている事態を語っている。その結果、ロスは自分の傲慢な理性に「ユリゼン」と呼ばれる別個の限定された形式を与えざるを得なくなっている。これから分かるように、『ユリゼンの第一の書』の第4章からの引用詩行は、この神話の表面上の物語以上に多くのことを語っているのである。

1 幾時代が幾時代に重なって彼の上を巡った！

石のような眠りのうちに幾時代が彼の上を巡った！
 暗い荒地のようにのび広がっていて変わりやすく
 地震によって裂かれて、陰うつな火を吐きながら、
 幾時代に重なって幾時代がぞととする病める
 苦痛のうちに巡った、彼のまわりに暗黒の
 つむじ風となって永遠の預言者は吼えた
 なおも彼の鉄の綴じ打ちつづけながら
 鉄のはんだを注ぎながら、身の毛もよだつ
 夜を幾更にも分かちながら。

2、そしてユリゼンは（これが彼の永遠界での名だ）

彼の多産の喜びを暗い秘密のうちに
 層一層曇らせ湧き立つ硫黄の液の
 中に彼の夢のような空想を隠した。
 永遠の預言者は黒いふいごをふくらませた、
 そして休みなく火ばさみを回した、そして槌を

絶え間なしに打った、新しく又新しく鎖を鍛えながら
輪をもって数えながら、刻々、日々そして年々を

3、永遠の心は制限を受けて怒りの渦を
止むことなくぐるぐるぐるぐるると回転させ始めた、
そして硫黄の泡が濃く湧き立ちながら
静まった、一つの湖だ、輝いている、そして澄み切って光っている、
寒い山々の雪の如く白く。

4. 忘却だ、無言だ、必然だ！
心の鎖の中に閉じ込められて、
同時に縮んでいく氷の足枷のように
有機性に奪われ、永遠界から裂き取られて、
ロスはその鉄の足枷を打ち続けた、
そして彼の溶炉を熱したそして鉄はんだと
真鍮のはんだを注いだ

制御不能となった理性と、その結果自分の理性に独立した存在を与える決断をするロスに関する物語は、穏やかな抽象的な印象を与えるが、その引用部分は、気軽な気分で一読しても全くそのような内容ではないことが分かる。そこには荒々しい、暴力的な動き、努力、勢い、極端な例がある。この詩行に登場する鉄、はんだ、真鍮、氷、硫黄などの物質は具体的なものであり、その詩全体は非常に物質的なイメージで満ちているように思える。

この印象を確認することは容易である。各連ごとに動詞を拾ってみると次のようになる。〔1〕*rolled, rolled, stretching, riven, belching, rolled, howled, beating, pouring, dividing*. 〔2〕*hiding, heaved, turned, beat, forging, numbering*. 〔3〕*bounded, rolled, surging, settled, shining*. 〔4〕*locked, shrinking, rent, beat, heated, poured*。これらは圧倒的に暴力的な勢いと動きを伴う動詞であり、最初の3連の最後の部分でそれぞれ*dividing, numbering, settled, shining*という語句の抽象的なあるいは静的な概念によって僅かに中断されている。これらの動詞は最初の3連のそれぞれにおいて静止状態へと繋がる、強烈な物理的な波状攻撃のように配列されているように思える。

記述的な単語をここで広く選んでみよう：*Stony, dark, changeable, sullen, ghastly, sick, horrible, prolific, dark, surging, sulphureous, dark, restless, incessant, ceaseless, sulphureous, thick, bright, clear, white, cold, disorganized, iron*。ブレイクの聖書の語法である形容詞句がある：'of darkness', 'of darkness'等である。しかし、上記のリストは強く劇的であると同時に、温

度 (sulphureous / cold) と一貫性 (changeable or surging / iron) と光 (dark / bright) に関する両極端の表現を含んでいる。

この一節の主題は、抽象概念を意味する神話における神秘的な変容であることは分かっている。その言語の文法上の主語である名詞を選択し、その一覧表を作ると、引用箇所における烈しい物質化のプロセスは更に強調されることになる：*ages, sleep, waste, earthquake, fires, forment, whirlwinds, prophet, rivets, solder(solder), night* はすべて第1連に見られる。これ以上続ける必要はないだろう。明らかに、たとえどれほど抽象的であろうとブレイクの理念は、しっかりと具象的で物理的な言語で伝達されている。

これまで検討してきた詩行の物理的な印象を確認した上で、この引用箇所で行っていることをより詳しく検証してみよう。自分自身の一部からロス、どのような方法で個別の存在を「創造」しているのだろう。これらの神話上の人物がどのように分裂していくのだろう。

「永遠の預言者」とはロスのことであり、この引用詩行では彼は鍛冶屋職人の姿を取り、絶え間なく金属を溶かし、はんだを注ぎ、鉄や真鍮を打って、新たに分離した存在であるユリゼンを何とか監獄の閉じ込め、その動きを抑えようとしている。ロスの行動は7-10行目、15-18行目、28-30行目に描写されている。この引用部分の他の詩行は、ロスの鎖や足枷がユリゼンの周りで造られてゆく中でユリゼンの姿を描いている。ユリゼンは'surging', 'whirlwinds', 'eddies', 'surging'(再度)という単語でその特徴が強調されている。そしてユリゼンの姿を取り巻いているイメージは、「荒地」と「暗黒」('dark', 'darkness', そして'night'は4回出現する)に囲まれた中での火山活動 ('belching ... fires', 'sulphureous fluid'等)のそれである。さらにユリゼン内部のエネルギーは荒々しく流動的であり、ロスのハンマー、鉄、真鍮の硬さとは対照的である。しかし、対立抗争が継続し、ロスが優位を占めるに従い、ユリゼンを描写するイメージは、次第に温度が下がり最後的には凍りついてしまう(「寒い山々の雪の如く白く」と「同時に縮んでいく氷の足枷のように」)。そして彼の「盛り上がる」流れる焔は小さな水たまりとなり、単に光を反射している(「輝いている、そして澄み切って光っている」)静かな「湖」となっている。

ユリゼンには、強烈な心理学的な物語も込められている。彼は最初は「石のような眠り」と「苦悩」に囚われている。ユリゼンの「喜び」と「空想」は更にますます隠蔽され、閉じ込められてゆき、ついには「永遠の心は制限を受けて怒りの渦を／止むことなくぐるぐるぐるぐる回転させ始めた」という抑圧を示す鮮明なイメージの中で、そのエネルギーを消耗してしまう。やがて、彼の心は「忘却、無言、必然」と「心の鎖」に囚われている。ブレイクはユリゼンはいまや「永遠界からは裂かれ」、有限の存在となり、彼の状態を描くために「有機性を奪われ」という用語を用いている。この物語は、ユリゼンをこれまでの彼との出会いから学んだ馴染みのある状態においている。ユリゼンは押さえ込まれ、有限の宇宙で鎖に繋がれ、「無限界」から切り裂かれており、自分自身に気づかず、自己破滅的な秘密を一杯抱えた状態に置かれている。彼はまた白さと冷たさという彼独特の特徴を身に付けてしまっていた(ユリゼンは『無垢と経験の歌』と『ヨーロッ

パ』では星、白髪と不能、「白い」純粹性という概念、石と山などと関連付けられていたことを想起するだろう)。従って、経験界の暗い森を支配している心が屈折し、不誠実な暴君がこの引用詩行の中で形成されつつあると言える。

しかしながら、ブレイクの表現方法の効果に着目すると読者は驚きを感じ、困惑することになる。これまでに会ったユリゼンは悪役であり、物質世界の抑圧的な独裁者であった。彼は吐き気を催すような偽善と冷酷な律法で、不正に溢れた社会を支配していた。ところが、この引用箇所では突然、彼は犠牲者であり、ロスによってきつく鎖に繋がれ、足枷をはめられている。読者にとって慣れ親しんできた恐ろしいユリゼンの心の状態を創造したのは、誰であったのかを考えてみよう。ここでは明らかに「永遠の預言者」であるロスが、その責任を担っている。一方で、これは必然であると確認している。つまり、「暗い荒地のように…、陰うつな火を吐きながら、…ぞっとする病める苦痛のうち」でロスが抑えようとしているイメージは脅威を与え、破壊的なイメージである。

『預言書』の作品群を研究していると、この種の難解な状況に幾度も遭遇することになる。解決法は一步身を引いて、より大きい視点で全体を見直すことである。そのことは循環の中の一つの出来事であり、全体像を思い起こすことが重要である。まず、ロスがユリゼンとオークの両者を創造し、彼の対立者であるオークが、やがてユリゼンを圧倒する反逆のエネルギーに変容することを思い出そう。ロスはこの2つの対立者両者を創造し、彼らの繰り返す葛藤の循環を開始しているのである。ユリゼンはロスが創造したものの一部に過ぎないことは明らかである。次に、全体の循環はロス自身の内面で生起しているダイナミックな過程を描いていることを忘れてはならない。鮮明で具体的な表現にも拘らず、ユリゼンは社会全体の一つの勢力であり、あるいは個人全体の中の一つの勢力なのである。この点はオークの物語によって強調されている。抑圧とオークの誕生をもたらす分割の物語を検討すると、オークが誰の子供なのか分からなくなってしまう。彼はユリゼンとロスの両者によって生まれたのである。オークはロスの息子であるが、やがてユリゼンに対して反抗するのである。

これ以上に混乱する必要はない。広い視点で神話を見直すと、混乱を解消してくれるので、何が重要なのが見えてくる。この引用詩行における出来事は全体の一部に過ぎないのであり、それは全体のプロセスの一部なのである。ブレイクのねらいは社会全体で、あるいは個人全体の中で生起しているダイナミックな過程を描写することなのだから、そして、この引用部分はその過程のひとつを描写しているに過ぎないのである。

ここでこの引用詩行が生み出している最も強烈で、最も直接的な印象を検討してみよう。それは強烈で赤裸々な暴力、野性性、葛藤である。ここから学ぶことは重要である。つまり、ブレイクの『預言書』作品群は葛藤と更なる葛藤へと続けざまに引きずり込む闘争の物語を語っており、その戦いは相互に対立し、創造しあうように思える対立物が連続して果てしなく現れる。それぞれの状態が、誕生、反逆、破壊、再生、あるいは分割、変容、復活という循環が繰り返される中

でその姿を現す。

このような理解は社会について何を語ってくれるのだろうか。まず、ブレイクは弁証法と呼ばれるプロセスを解説しているのである。その過程は対立する勢力間の争いのひとつであり、進歩はこの闘争の結果であることを意味している。『ヨーロッパ、一つの預言書』の革新的な内容は、これまで検討してきたように、抑圧者と被抑圧者の間には葛藤があり、それは暴力に満ちた破壊的なものになり（オークの「燃える焰」はヨーロッパ全土で烈しく燃えている）、しかし同時に解放の力となるということを見越しているのである。新しい状況へと繋がる、独裁体制と抑圧の徹底的な崩壊へと繋がるのである。

ここではこれ以上これらの革新的な内容の作品に踏み込む余裕はないが、以下のような推測が成り立つのに十分な神話に関する知識に到達していると言える。つまり、段階的に新しい「対立者」は形成され、相互に反発し合い、覇権を求めて争い、その抗争はさらなる暴力的な解放へと繋がってゆくのである。この段落とその前の段落で解説してきた社会に関する、ダイナミックで弁証法的な分析は、約1世紀後に構築された最も影響力を持った理論であるマルクス主義との関連性を強く示唆している。

ヴィジョンを見る能力のある理想主義者ブレイクと、物質主義者を自認するマルクスとを比較することには無理があり、二人はその理由ゆえに根本的に対立関係にあるとの議論も成立するだろう。次章で検討するように、この反論には一理ある。ブレイクの理想主義は、物質主義者マルクスが決して辿り着くことがない方向に自らを導いている。その一方で、本章でこれまで検討を続けてきた社会にかかわる中心的な神話は、一般には「オークのサイクル」²³と呼ばれているが、ブレイクが「墮落した」、あるいは「物質的な」世界と呼んでいたものに当てはまる。ブレイクは社会の分析においては、マルクスと同列視されることに反対はしなかったと思われる。社会の病弊に対する二人の洞察と資本主義社会の経済構造や権力構造に対する洞察は、驚くほど類似していると言える。²⁴

まとめの議論

このまとめの議論における中心的な目的は、『無垢と経験の歌』の中で探った社会的な問題と、『預言書』の作品群の中で検討を始めたヴィジョンを結びつけることである。これからの議論を通じて、適時「地獄の箴言」に言及することになる。以下は『天国と地獄の結婚』の7版から10版に現れる簡潔で格言的表現を集めたものである。ケインズの『ブレイク全集』の150ページから152ページにかけて掲載されており、ブレイクの『預言書』を研究するすべての人にとって必読の書である。

1. これまで検討してきた『無垢と経験の歌』は社会における不正、苦しみ、偽善の個別的な事

例を明らかにしてきた。煙突掃除の少年と「聖なる木曜日」に見られる抑圧的な福祉事業における子供の奴隷の問題から、「ロンドン」や「愛の園」におけるより広範な分野に向けられた怒りを取り扱っていた。『無垢と経験の歌』の文脈では、これらの社会的病弊は、ブレイクの家族観（「迷った少女」と「見つかった少女」を参照せよ）と個人（「大地の答え」と「天使」を参照せよ）に関する分析と関連があることが分かった。その詩集をより広範に研究してみると、ブレイクの社会的そして政治的思想と家族、友人関係、人間関係に対するブレイクの洞察を統合することが可能となる。「迷った少年」、「迷った少女」、「毒のある木」と「人間の抽象」を研究すると、これらの多様なテーマに共通する思想の関連性を更に確認することが出来るようになる。

2. ブレイクは、最初の怒りを刺激している特定の不正義からその焦点を移動させている。それぞれの詩作品は、例えば煙突掃除の親方に身売りされた子供たちの苦境というよりは、より普遍的な根本的な原因を示唆したり、表現したりしている。社会体制が作り上げた天国、黒い法衣をまとった聖職者によって警戒されている、禁令の様式をとった教会の律法（「汝するなかれ」）、ロンドンの「特許状を与えられた」通りで見られる経済的権力と奴隷制、ブレイクが「心に造った手枷」と呼んでいるあの個人的恐怖とその限界は、すべて腐敗した世界の被告人である。ここでこれまで学んだことの要約を試みてみよう。

〔1〕恐怖—ヴィジョンの喪失と社会体制の誤った教義から生まれた恐怖は、結果的には残酷性に繋がる。恐怖は権力者を支配するという洞察は、「地獄の箴言」の中で巧みに表現されている。：勇気に弱いものは狡猾さに長けている。

〔2〕律法—教会の律法であろうと国法であろうと、状況に対応していない法は抑圧的である。この見方に関連して、「地獄の箴言」にある「溜まり水は毒だと思え」、「監獄は法律の石で造られ、売春宿は宗教の煉瓦で建てられている」を熟読することで納得がゆくだろう。

〔3〕福祉事業—ブレイクは、福祉事業を不平等な現状を支えている一つの犯罪であると見なしている。ブレイクの福祉事業に関する分析は、その存在理由を追究していることを確認してきた。福祉事業はまず不正義が行われているがゆえに存在しており、従ってその事業自体が自然に反する存在である。

〔4〕宗教、愛国主義、商業、戦争—これらすべては、弱者を搾取している現状に対する偽善的な逃げ口上に過ぎない。「煙突掃除の少年」と「ロンドン」(両作品とも『経験の歌』から)を通してあからさまな責任転嫁の実態について学んできた。加えて、以下の「地獄の箴言」を検討してみよう。「青虫が卵を産むために一番美しい葉を選ぶように、僧侶はその呪いを一番美しい喜びにかける」。「羞恥は高慢の外套である」。「死体は虐待に復讐しない」。「慎重とは無能に求愛された、富める醜い老女である」。

ここに列挙してきた社会悪は兆候と呼ぶべきもので、ブレイクの思考はそれらに共通する原因の追究に向けられていた。しかし、この究極の「原因」は単一の名称を拒む概念である。それは想像力とエネルギーに対する理性の優位性、霊魂と無限界に対する物質主義と有限界

の優位性を含む理念であり、5つの即物的な感覚内部のヴィジョンの欠落と制限を含む理念である。とりわけブレイクは魂からの肉体の人工的な分離を問題視している。

肉体と魂の分離はどのように起こったのだろう。ユリゼン的な神がその唯一の原因であるとブレイクは示している。この原初の罰を与える神格は、「残酷で、嫉妬深く、利己的」で、自然の静的なエネルギーへの自分の恐れを人類に向けるために、抑圧的な律法や恐怖を利用している。これまでの分析が、結局はその出発点に立ち戻ることは明らかである。原因と兆候は相互入れ替え可能であり、その循環を加速し、その動きの内的動因となっている、社会の病弊の「サイクル」の一部なのである。

3. 個々の詩作品は読者にとっては一つの挑戦であり、いくつかの作品は複雑な様式をとっている。その問題は「安易な」道徳的解決策を拒んでいる。例えば『無垢の歌』の「煙突掃除の少年」ではトム・ダックレを虐待から解放し、悲惨な状態に置くことになるのか、あるいは欺かれた状態に放置して幸福な気持ちを守るのかどうかの選択を迫られている。『経験の歌』の「聖なる木曜日」では一時しのぎの福祉を拒否し、完全な革新を求めるのかの選択を迫られている。他の詩作品では、本来は道徳律の柱であるべき教会、結婚、国王に対する烈しい義憤を共有するように求められている。『無垢と経験の歌』に見られる社会批判はその作品を強力な社会運動の先導文書となっており、根本的な改革の必要性を示唆していることを確認してきた。
4. これまで議論してきた一般的な洞察はブレイクの攻撃目標、つまり、英国社会、その国家と宗教上の権威、英国の資本主義とその搾取に関する個別の批判に過ぎない。しかしながら、兆候と原因が相互にその継続を進めている社会に対する循環的分析は、ブレイクの理念を統一された哲学に統合する方法を検討する方向へと導いている。ブレイクは、社会と歴史におけるダイナミックで弁証法的プロセスというヴィジョンを見ていたし、ブレイクが物質世界に関する本質的真理と見ているヴィジョンを提示している。抑圧と分裂への墮落、革命という暴力的な循環、この循環を取り戻し、生を永遠界に解放する常に存在する手段は、個人と社会的コンテクスト両面において人間性の普遍的なダイナミクスに存在していることを示している。様々なエネルギー、勢力、「欲望」やその過程における様々な段階には社会の「予言的」ヴィジョンの中で、名前、特徴、物語が与えられている。これまでの検討の中で象徴的人物の数人には出会ってきた。特にユリゼン、オークとロスには馴染みがある。これらの主要な人物の特徴は『無垢と経験の歌』に辿ることが可能である。例えば、『経験の歌』の「序詞」と「大地の答え」における利己的な「人間の父」と、『無垢の歌』の「聖なる木曜日」の寺院人はユリゼンの特徴を示している。「愛の園」の怒り狂った話し手と、今後検討する「幼子の悲しみ」の子供は、その人生の循環の中で後にオークになる兆候を示している。前者には反抗的な怒りがあり、後者は辛抱強く力を溜め、来るべき時を待っている。
5. 従って、ブレイクの『預言書』に見られる人生に関する錯綜した象徴で溢れた「予言的なヴ

イジョン」は、彼の時代の不正義の裏にある永遠の真理の表現なのであり、その真理の多くが『無垢と経験の歌』の中で直に提示されている。

6. ブレイクは革命家である。一つの「地獄の箴言」は「怒れる虎は教育された馬より賢い」と語っている。ブレイクの時代と現代との関係については手短に触れてきた。ブレイクは現代においても革命家である可能性は高い。

分析手法

1. 本章では最初の2つの章と同じように同一の広範囲にわたる手法を利用して、『無垢と経験の歌』の抒情詩に迫ってきた。これらの手法をそれぞれの読み方が相応しい時と所では、分析が一層の統一性と継続性を獲得できるように、より柔軟に利用し始めた。

2. 『預言書』作品群。これまで一つの預言書（『ヨーロッパ、預言書』）からの長めの引用詩行と、もう一つの預言書（『ユリゼンの第一の書』）からの短めの引用詩行を検討してきた。そうして、預言書を読み込む際に有効で重要な原則を導き出してきた。

〔a〕まず、イメージアリーと出来事がはっきりした感情に訴える箇所と出会えるまでは、理解できない部分には気にせず読み進んでみよう。主題と物語の理解が非常に危うい場合でも、読者にとっては相応しい箇所に到達したことになる。このような方法で選んだ詩行がより深い検討の対象となる。

〔b〕検討の対象となる預言書の主題と物語の一般的理解を獲得しよう。この初期の段階では、詳細な解説書や研究書に手を出さないことが重要である。それらの文献はあまりにも多くの固有名詞と概念に言及し、読者の読み方を惑わすことになる。その代わりに、読者の手元にあるブレイクの作品集における、読んでいる作品の冒頭の注を読んでおこう。本章で『ヨーロッパ、預言書』を検討した際、この物語に関する一般的情報を提供した。この情報とそれ以上の情報はアードマン²⁵とスティーブソン²⁶の全集の冒頭の注の中で容易に入手できる。

〔c〕自分が選択した詩行に戻り、注意深く読み込んでみよう。目的はその物語と出来事を理解し、選択箇所の詩行で顕著な役割を果たしている象徴的人物を選び出すことである。その登場人物同士の関係とその役割を簡潔に、しかし、可能な限り正確にまとめてみよう。

〔d〕ブレイクに関する参考文献（例えば、S. Foster Damon, *A Blake Dictionary*, Providence, Rhode Island, Brown University, 1965）を活用し、選択箇所顕著な働きをしている人物について調べてみよう。目的は調べる項目を出来るだけ限定することであることを忘れないように。選択箇所に登場する、重要ではない人物と参考文献の中で言及されている他の固有名詞は無視した方がよいだろう。読者にとって理解が必要な、限定された主役の人物の重要性を理解することに集中しよう。

この段階ではブレイクの神話の特定の箇所における物語と出来事をしっかりと理解できているだろう。そして主役の人物が誰であるかを理解できているだろう。これらの人物の行動の理由とこの物語の内容について深い理解を獲得しているだろう。これまでの理解をまとめておくことが有益である。例えば、『ヨーロッパ、預言書』の引用詩行の分析で、この段階では、以下のようにまとめることが可能だろう。

「アルピオンの天使は英国政府である。引用部分は解放運動（アメリカ独立戦争）に敗れたばかりの政府について語っている。政府は抑圧を強化し、その強硬路線を正当化すると同時に、宣伝道具として宗教を利用している。その詩では、アルピオンの天使（政府）はユリゼン（理性と宗教的律法の独裁体制）を喚起して、オーク（反逆、エネルギー、自由への願望）に戦いを挑ませている。この引用詩行の最終部分ではこの戦いの決着はついていない」。

この様に、「理解の枠組み」となるまとめに到達すると、再度選択した箇所に立ち戻る準備ができたと言える。

ここで3つの疑問について更に検討を深めることが出来る。

〔a〕このまとめを念頭において、『無垢と経験の歌』で検討した詩作品との関連性を捜してみよう。これまでの『ヨーロッパ』の検討において、ユリゼンの特性を確認し、作品「大地の答え」の「人間の父」のように、『無垢と経験の歌』で見られた白髪で老齢の権威主義的な人物と関連付けてきた。また、この引用箇所の最後の部分で抑圧の全体像を確認し、「ロンドン」と「愛の園」と関連付けてきた。ここまでで、ブレイクの思想における「心が造った手枷」と抑圧的な宗教的律法の理解を豊かにする手助けとなっている。

〔b〕選択箇所の詩行とイメジャリーを検討しよう。詩行が上げている自然な効果の力を解釈の段階で覆い隠すようなことにならないようにすることが重要である。ブレイクは現実の状況と問題について書いており、鮮明で具体的な言葉でそれらを読者に伝えていることを忘れないようにしよう。

〔c〕ここで最後に、これまでの研究を更に先に進めることができる。検討してきた作品の中で他の相応しい詩行を選択し、作品全体を再読し、検討してみよう。参考文献の中で関連する固有名詞や登場人物についてより詳しく調べてみよう。はっきりとした理解、つまり「理解の枠組み」を手にしたこの段階で、専門的な研究者による様々な解釈を読んでみよう。

ブレイクの預言書は難解で暗示的な表現が多い、そしてその作品群は複雑な寓意的な物語である。ここまで説明してきた読解法は『預言書』の理解を助けてくれるだろう。そして『無垢と経験の歌』の中でより理解が容易な抒情詩を解釈し、ブレイクの思想はブレイクの理念の一貫性がある統合されたシステムであることが分かる。最も重要な助言は次のような内容となる。重要で

ない細部にはこだわる必要はない。全体的な流れと主要な人物像をまず把握せよということである。今後の研究において詳細な部分に立ち入る時間は十分にあるのだから。

今後の研究

1. 『無垢と経験の歌』の二つの作品を分析しなさい。『無垢の歌』の「聖なるイメージ」と『経験の歌』の「人間の抽象」を検討することを勧めます。
2. 『天国と地獄の結婚』の第11版を検討しなさい。この版は第二章で検討した第14版とその内容において類似している、説明的な版である。この版で語られている聖職者の始まりの物語と「聖なるイメージ」と「人間の抽象」の検討から得た結論とを比較してみよう。『無垢と経験の歌』から『天国と地獄の結婚』へと、そしてその逆への明確な洞察を辿ることが可能となる。それぞれの本文、つまり抒情詩と預言書は、一方の理解が他方の理解を深めてくれることに気がつくであろう。
3. 本章における『ユリゼンの第一の書』の第10版の分析に加えて、『ユリゼンの第一の書』の第10、11、12版の詩行の中で語られている「ユリゼンの変化」について更に検討しなさい。ロスとユリゼンの葛藤、そして五感の監獄は、強烈で具体的なイメージと続く印象的なスタイルで引用箇所後に続いている。本章において具体的に示し、前述の「分析方法」で解説した読解法を活用しなさい。第10版を研究すると更なる研究への契機となるだろう。
4. 更なる読み込みは、ブレイクの作品に共通する原則に関する理解を深めてくれるだろう。『天国と地獄の結婚』の第7版から第10版に掲載されている「地獄の箴言」を検討してみよう。それぞれの「箴言」を熟読し、『無垢と経験の歌』の中の特定の詩、あるいは詩の一部に関連しているかどうかを考察してみよう。その短詩の内容がその「箴言」の中で具体的に示されたり、行動によって示されたり、あるいは部分的に例示されたりしていることに気づくであろう。このような方法で、抒情詩に対応する箴言がいくつあるのか数えてみよう。

注解

- 1 本翻訳はNicholas Marsh著 *William Blake: The Poems* (New York: Palgrave, 2001) の第3章である。
- 2 当時の煙突掃除の子供たちのおかれていた悲惨な状況に関してはDavid V. Erdmanの *Blake Prophet Against Empire* (New York: Princeton University Press, 1954) に詳しく紹介されている。
In 1788 philanthropists secured a piece of protective legislation for the “climbing boys” which provided that a boy should not be apprenticed before he was eight, should be thoroughly washed once a week, and should not be compelled to go up an ignited chimney. (p. 132.)
- 3 煙突掃除の少年たちのおかれていた状況とその現実に対する反応についてはZachary Leader著 *Reading Blake's Songs* (Boston: Routledge & Kegan Paul, 1981) には以下のように簡潔にまとめられている。
That the sweep himself is no more genuine or spontaneous only increases our sense of design or

contrivance. His reaction to his situation is hardly what we expect from a child, even from a stylized Blakean child. In stead of confusion, fearful anger, or fatigued indifference-all believably child-like reactions to the miseries of a sweep's lot-we find reasoned analysis and understanding, not just of parents(compare the dispirited blankness of the innocent sweep's 'When my mother died I was very young. /And my father sold me...') but of society as a whole. What the child says, of course, absolutely right. The social injustice he condemns is real, and so too is his perception of 'God and his Priest and King' as the true enemy. (pp. 160-61.)

- 4 21世紀のアジアにおける児童虐待, 児童奴隷に関しては以下のサイトにその状況が詳しい。Child Abuse in Asia: Child slavery in Asia: Child abuse is a state of emotional, physical, economic and sexual maltreatment meted out to a person below the age of eighteen and is a globally prevalent phenomenon.
<http://www.africaw.com/forum/f2/child-abuse-in-asia-child-slavery-in-asia-t2638/>

5 これはブレイクの常套手段である。ブレイク自身の価値判断を読者に強要したり, 彼自身の正義感への共感を求めるのではなく, 悲惨な現実を提示することによって, 読者自身の判断を促す論法が特徴的である。

- 6 Marx, Karl(1818-83) ドイツの社会主義者。政府の弾圧のためバリーに亡命, Engelsと同志となり, 1848年に「共産党宣言」を書く。翌年ロンドンへ行き, 第一インターを指導, Das Kapital (『資本論』全3巻, 1867-95)の著述に専念し, その地で歿した。弁証法的唯物論の立場から資本主義の矛盾を衝き, 革命によって階級なき理想社会の実現に努めた。文芸の本質を社会の下部構造から究明することを提唱するが, 課題として残された。上田和夫〔編〕『イギリス文学辞典』研究社, 2004年, p. 222。

- 7 Holy Thursday in the Anglican calendar is not the Thursday of Holy Week, but the day of the Ascension. On that date, the orphans of London were assembled in St. Paul's for a special service. King George III delighted in it; Haydn was deeply impressed. S. Foster Damon *A Blake Dictionary: Ideas and Symbols of William Blake* (Providence: Brown University Press, 1965), p. 187.

- 8 この祝日の様子は, 1818年の記述に詳しい。

These charity children are coming from church, with the parish beadle before them. Several thousands of poor children are taught to read, work, and write, in the different charity-schools of London, and to do their duty to God and to their neighbours; which will enable them to become respectable in this world, and tend to make them happy in the next.

Once a year, about six thousand charity children, dressed in uniforms of different colours, assemble in St. Paul's Cathedral, on benches raised to a greater height one above the other, circularly, under the dome. The order with which each school finds its own situation, and the union of so many voices, all raised at one moment to the praise of their great Creator, as they chaunt the hundredth psalm on the entrance of the clergyman, cause a most delightful and affecting sensation in the minds of much innocence, under such protection, would be reared to virtue and happiness, must add greatly to the effect.

G.E.Bentley, Jr *Blake Record* Second Edition (New Haven and London : Yale University Press, 2004) p. 338.

- 9 You shall not have no other gods before me.

You shall not make for yourself a graven image, or any likeness of anything that is in heaven above, or that is in the earth beneath, or that is in the water under the earth; you shall not bow down to them or serve them; …

You shall not take the name of the Lord your God in vain; for the Lord will not hold him guiltless who takes his name in vain.

Remember the sabbath day, to keep it holy….

Honor your father and your mother, that your days may be long in the land which the Lord your God gives you.

You shall not kill.

You shall not commit adultery.

You shall not steal.

You shall not bear false witness against your neighbor.

You shall not covet your neighbor's wife, or his manservant, or his maidservant, or his ox, or his ass, or

anything that is your neighbor's.

The Ten Commandments from Exodus (20: 3-17)

- 10 Internal rhyme 中間韻。行末韻end rhymeに対し、同じ詩行の、または他の詩行の中間の語で韻rhymeを踏んでいるものをいう。『イギリス文学辞典』pp. 176-77.
- 11 ブレイクの活躍していた18世紀末のロンドンにおける低賃金労働者（ブレイク自身や煙突掃除の少年たちも含む）の実情についての詳細な参考文献としては、以下の研究書が有益である。
- Saree Makdissi *William Blake and the Impossible History of the 1790s* (Chicago: The University of Chicago Press, 2003)
- 12 アメリカでは独立戦争（1775-83）が勃発し、2万人以上の英国陸軍兵士が死傷している。また、1805年10月21日のフランスとのトラファルガー海戦では、大勝利を収めたが、英国海軍では1,666人の死傷者があった。1815年6月18日のフランスとのウオートル会戦では英国連合軍は1.7万人の死傷者を出している。
- 13 ブレイクの預言書群を理解する上で、ブレイクの根源的な人間理解をまとめておくことは今後の検討にとって有益と思われる。以下の引用はその意図に相応しいものと思われる。

Blake's words, in these little works of 1788, *There is no Natural Religion* (in two series) and *All Religions are One*, express some of his fundamental beliefs. Man is, by nature, 'only a natural organ subject to Sense', but his 'Poetic or Prophetic' power releases him from bondage to nature and he therefore apprehends more than his organs of perception, however, acute, can discover. 'The desire of Man being Infinite, the possession is Infinite & himself Infinite.' To Blake, art and religion are the same thing. The poet is the prophet. God, 'the Poetic Genius', is 'the true Man', Christ. The application of Blake's religious philosophy is: "He who sees the Infinite in all things, sees God. He who sees the Ratio only, sees himself only." Blake concludes his denial of natural religion: "Therefore God becomes as we are, that we may be as he is." Already setting himself apart from popular belief, while asserting his role in Christian prophecy, Blake, at the age of thirty-one, subtitled *All Religions are One* 'The Voice of one crying in Wilderness'. His argument is: 'As the true method of knowledge is experiment, the true faculty of knowing must be the faculty which experiences.' He believes that 'The Religions of all Nations are derived from each Nation's different reception of the Poetic Genius, which is every where call'd the Spirit of Prophecy.' His final principle is: 'As all men are alike(tho' infinitely various). So all Religions &, as all similars, have one source.' He asserts: 'The true Man is the source, he being the Poetic Genius.'

Michael Davis *William Blake: A new kind of man* (London: Paul Elek Limited, 1977), pp. 36-37.

- 14 ブレイクの預言書に関する引用箇所翻訳は、梅津済美訳『ブレイク全著作』（名古屋大学出版会、1989年）による。この労作は上下巻からなり、本文中の引用詩行の翻訳は、上巻の417～420ページに掲載されている。
- 15 アメリカ独立戦争（1775-1783）では、英陸軍兵士56,000人がアメリカ大陸に派遣され、2万人前後の兵士が死傷している。
- 16 フランス革命（1789-1799）中も英国軍とも様々な小競り合いがあったが、ナポレオンが登場後、ウオートルの会戦でフランス軍と英国陸軍を中心とする連合国軍が激突した。連合国軍側では約17,000名の死傷者が出た。
- 17 原注1: Damon, S. Foster, *A Blake Dictionary: The Ideas and Symbols of William Blake* (Brown University Press, Providence, Rhode Island, 1965) p. 321.
- 18 William Hayley (1745-1820) は自称詩人であり、また、特にサセックスの小村フェルバムに隠遁後は、若い芸術家の援護者としての生活を楽しんでいた。1800年から1803年にかけて、彫版画家としてのブレイクをフェルバムに呼び寄せ、自分の作品への挿絵を製作させた。しかし、芸術観の違いから様々な論争となった。
- 19 ブレイクの神話世界に冠する参考文献としては邦文では、大熊昭信著『ウィリアム・ブレイク研究—「四重の人間」と性愛、友愛、犠牲、救済をめぐって』（彩流社、1997年）が詳細で有益と思われる。

それは（四重構造）ブレイクの神話の登場人物の構成に窺えた。ユリゼン、ルヴァ、サーマス、アーンナであるが、これが人間の四つの心的能力、理性、愛情、意思、想像力を寓意している。….

性的な在り方にしても、両性具有がエデン、雌雄同体がウルロ（ウルロの一部に形成された宇宙卵殻もこれに含まれる）、男女別体がジェネレーション、そして男女別体の理想的な性的世界がベウラということになる。ブレイクはこれを理想的な結婚の領域として描いている。ブレイクの性の思想はこれからの重要な話題であるが、ブレイクは母、妻、娘といった女性原理は、男性原理をこの世（物質界）に引き留める

原理であるとみている。それがヴェイラといった登場人物によって具体化される。…それからこの世に男と女として生まれることでそうした物質界から脱出する契機を得るのである。つまりこの世の男女の性の営みを通して、聖なる世界へと抜け得る契機としようというのだ。(16ページ)

- 20 原注2 : Blake, William, *The Book of Urizen*, ed. and with a commentary by K. P. Easson and R. R. Easson, (London: Thames & Hudson, 1979).
- 21 原注3 : Damon, S. Foster, op. cit., pp. 309-11.
- 22 *A Blake Dictionary* : Luvah is closely associated with Jesus. When Luvah is perverted into Hate, he causes the Incarnation; "for when Luvah sunk down, [Jesus] himself put on [Luvah's] robes of blood [the flesh] lest the state call'd Luvah should lease; & the Divine Vision walked in robes of blood till he who slept [Albion] should awake" (*FZ* ii:263). Jesus is Love in the human form. He bears all Luvah's afflictions (*FZ* i: 364)…… p.255.
- 23 オルクサイクル, オルク循環, またはオルクの伝説に関しては, 大熊昭信著の『ウィリアム・ブレイク研究』に詳細な研究成果がまとめられている。特に, 「オルク循環の構造とその意味」の項目を参照 (218から227ページ)。
- 24 ブレイクとマルクスの思想上の類似点については次の研究書が有益と思われる。
Michael Ferber *The Social Vision on William Blake* 4th, ed. (New Jersey: Princeton University Press, 1985). Ferberによると, ブレイクとマルクスの関係について重要なのは, その類似性ではなくその相補性, 対立関係であると述べている。
Although Blake often sounds like the young Marx, who was himself a Romantic poet before he turned to philosophy and economics, it is their complementarity, even their conflict, which is valuable, not their resemblance. So I agree with E.P. Thompson when he says, "If I had to devise my own pantheon I would without hesitation place within it the Christian antinomian, Whilliam Blake, and I would place him beside Marx." (p. ix.)
- 25 Edited by David V. Erdman, Commentary by Harold Bloom *The Poetry and Prose of William Blake* (New York: Doubleday & Company, 1970).
- 26 Stevenson, W. H., ed. *Blake: The Complete Poems* 3rd, ed. (London: Pearson Longman, 2007).

(みやまち せいいち 札幌学院大学人文学部教授 イギリス文学専攻)